

堀池遺跡

福岡県筑紫野市大字二日市所在遺跡の調査

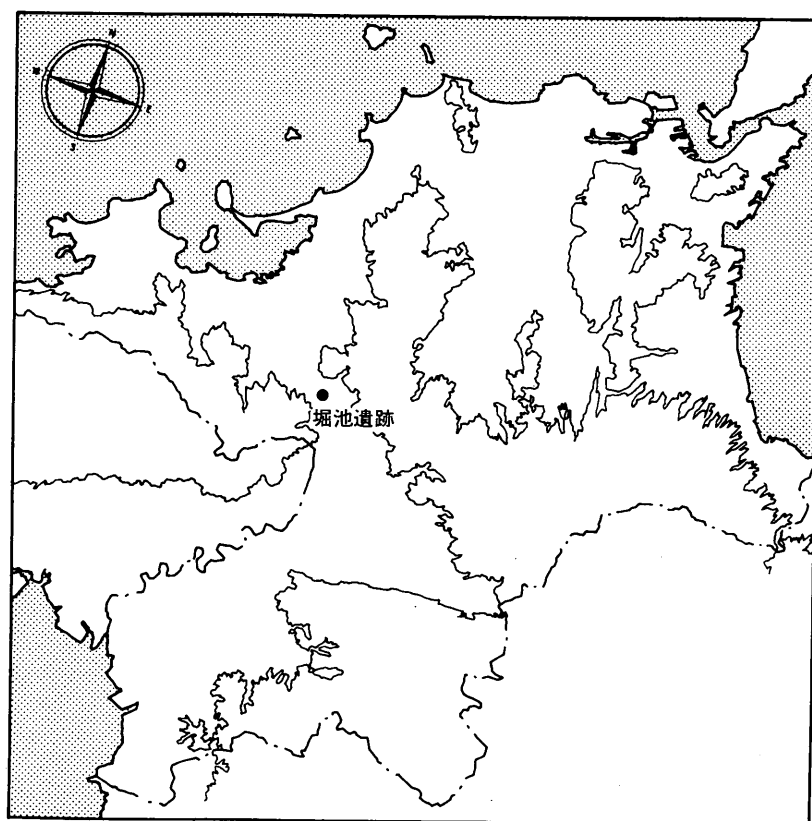
筑紫野市文化財調査報告書

第 4 7 集

1 9 9 7

筑紫野市教育委員会

ほり い け い せ き
堀池遺跡



序

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から交通の要衝として栄えてまいりました。今日までの発掘調査でも弥生時代の遺跡からは、中国や朝鮮半島で製作された青銅器や陶磁器などが発見され、また奈良時代には市の北部が大宰府条坊の一部だったようです。この大宰府から豊前へ通じる官道も当市を通り、近年の発掘調査では万葉集に詠まれた蘆城駅家の跡と思われるものも発見されました。江戸時代においても長崎街道、日田街道、薩摩街道が通り、筑前六宿に数えられる原田宿、山家宿がありました。そして今日、九州縦貫自動車道、国道3号線、同南バイパス、国道200号線、同冷水バイパス、国道386号線、鳥栖・筑紫野有料道路、JR鹿児島本線、JR筑豊本線、西日本鉄道大牟田線が通っています。ここに現在8万余の人々の暮らしがあり、その数は年々増加しております。

福岡が日本におけるアジアに開かれた門戸と位置づけられるならば、筑紫野市は九州におけるクロスロードと言えましょう。このような歴史に育まれた当市には、たいへん多くの遺跡があります。

福岡市のベッドタウンとして、発展が進む当市には様々な開発が行われ、文化財に大きな影響を及ぼしております。今日的な人々の営みのなかで、後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護するため、さらに努力を重ねる所存でございます。

平成9年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永瀨 正敏

例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴い筑紫野市教育委員会が、実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、谷 康尚氏との埋蔵文化財発掘調査委託契約により実施した。
3. 調査対象地は筑紫野市大字二日市826番地の1の一部、1,800㎡である。
4. 現地での発掘に係る実測・写真撮影は奥村俊久が担当するとともに株式会社パスコ福岡支社に空中写真測量を委託した。
5. 出土遺物の実測は土器を仁田坂聡、森部順子、奥村が行った。
6. 製図は有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 出土遺物の写真撮影はフォトハウスおかに委託した。
8. 遺構番号は、発掘現場において何らかの完結する遺構になると考えられるものを、頭にSを冠し、001から通し番号を付け、単体で完結しないピット等は頭にPを冠し、001から番号を付した。

報告に当たっては、遺構の性格づけを行い、竪穴式住居跡をS I、土壇をS K、掘立柱建物をS B、溝状遺構をS Dの略号を与え、その下に発掘現場においてSの後に付けた番号をそのままに付した。ピット等については略号をS Pとし、後にそのままP番号を付した。また、今回は堀池遺跡の第1回目の調査であることから、頭に1を付すことにした。

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
1. 調査概要	4
2. 竪穴式住居跡	4
3. 土壌	4
(1) 1SK001	4
(2) 1SK004	5
(3) 1SK005	7
(4) 1SK006	7
(5) 1SK007	8
(6) 1SK008	9
(7) 1SK016	9
(8) 1SK017	10
(9) 1SK022	10
(10) 1SK023	10
4. 掘立柱建物	11
(1) 1SB018	11
(2) 1SB019	11
(3) 1SB024	11
5. 溝状遺構	13
(1) 1SD002	13
(2) 1SD011	13
(3) 1SD012	13
(4) 1SD013	14
(5) 1SD021	14
6. ピット	14
IV まとめ	16

挿図目次

	頁
第1図 堀池遺跡周辺遺跡分布図(縮尺1/25,000)	2
第2図 堀池遺跡周辺地形図(縮尺1/2,500)	3
第3図 1SI010実測図(縮尺1/60)	4
第4図 1SK001実測図(縮尺1/40)	4
第5図 1SK001出土土器実測図(縮尺1/4)	5
第6図 1SK001出土石器実測図(縮尺1/2)	5
第7図 1SK004実測図(縮尺1/60)	6

第8図	1SK004出土土器実測図（縮尺1／4）	6
第9図	1SK005・1SK006実測図（縮尺1／40）	7
第10図	1SK006出土土器実測図（縮尺1／4）	7
第11図	1SK007実測図（縮尺1／40）	8
第12図	1SK007出土土器実測図（縮尺1／4）	8
第13図	1SK008実測図（縮尺1／40）	9
第14図	1SK016・1SK022実測図（縮尺1／80）	9
第15図	1SK016出土土器実測図（縮尺1／4）	10
第16図	1SK017実測図（縮尺1／40）	10
第17図	1SK017出土青磁実測図（縮尺1／2）	10
第18図	1SK022出土土製品実測図（縮尺1／2）	10
第19図	1SK023実測図（縮尺1／30）	11
第20図	1SK023出土土器実測図（縮尺1／4）	11
第21図	1SB018実測図（縮尺1／80）	11
第22図	1SB019実測図（縮尺1／80）	12
第23図	1SB024実測図（縮尺1／80）	12
第24図	1SD002・011～013実測図（縮尺1／30）	13
第25図	1SD011出土土器・石器実測図（縮尺27＝1／4・28＝1／2）	13
第26図	1SP249実測図（縮尺1／20）	14
第27図	ピット出土土器実測図（縮尺1／4）	15
第28図	1SP030出土土玉実測図（縮尺3／4）	15

付 図

付図	堀池遺跡発掘調査遺構配置図（縮尺1／100）	1葉
----	------------------------	----

I 調査に至る経過

平成2年2月5日付けで、谷 康尚氏より筑紫野市教育委員会に筑紫野市大字二日市826番地の1及び2、3,913.96㎡の、文化財有無の照会があった。照会はアパート及び一戸建住宅等の計画であり、市教育委員会は同2月16日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生時代の集落跡や大宰府条坊跡に関連すると考えられるような溝状遺構が検出され、平成2年2月21日付けで回答を行った。この回答に基づき谷氏から埋蔵文化財発掘の届出が提出され、市教育委員会では7月12日付けで福岡県教育委員会に進達した。平成2年8月22日、工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知が市教育委員会に到達し、直ちに谷氏に通知した。その後、数度の協議を行い、当面、工事予定地のうち緊急度の高い南半を市教育委員会で調査することとし、平成2年9月1日付けで発掘調査の通知を行うとともに、9月18日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。発掘作業は平成2年10月16日から同12月20日まで実施した。

なお、調査関係者は下記のとおりである。

総 括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	永淵正敏
庶 務	筑紫野市教育委員会	社会教育課 課 長	川原孝之
		社会教育課 文化財係 係長	山野洋一
		社会教育課 文化財係 主事	奥村俊久
発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課 文化財係 主事	奥村俊久
		嘱託	向田雅彦
		(現 鳥栖市教育委員会技師)	

II 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ真中に位置し、東から三郡山塊、西から脊振山塊が迫り、その間を、有明海に注ぐ筑後川の支流である宝満川や博多湾に注ぐ御笠川の支流である鷺田川などの河川により狭長な平野が形成される。この狭長な平野部の中央に堀池遺跡は立地する。周辺部には日田街道の二日市宿があり、現在ではJR二日市駅を中心とした市街化が進んでいるため旧地形は明確ではない。しかし、JR二日市駅一帯の地形がやや高く、この部分に遺跡が所在しているものと推定され、今回の調査区域はその縁辺部にあたると考えられる。

本遺跡の北側は推定大宰府条坊跡が広がり、北側150mでは平成元年度に大宰府条坊跡第85次発掘調査が行われ、南北に走る溝状遺構や掘立柱建物のほか、古墳時代初期の竪穴式住居跡などが検出されている。本遺跡より南側の平野部では遺跡は確認されていないが、平野の東西に迫る丘陵部や低台地上には弥生時代を中心に数多くの遺跡が所在する。

註

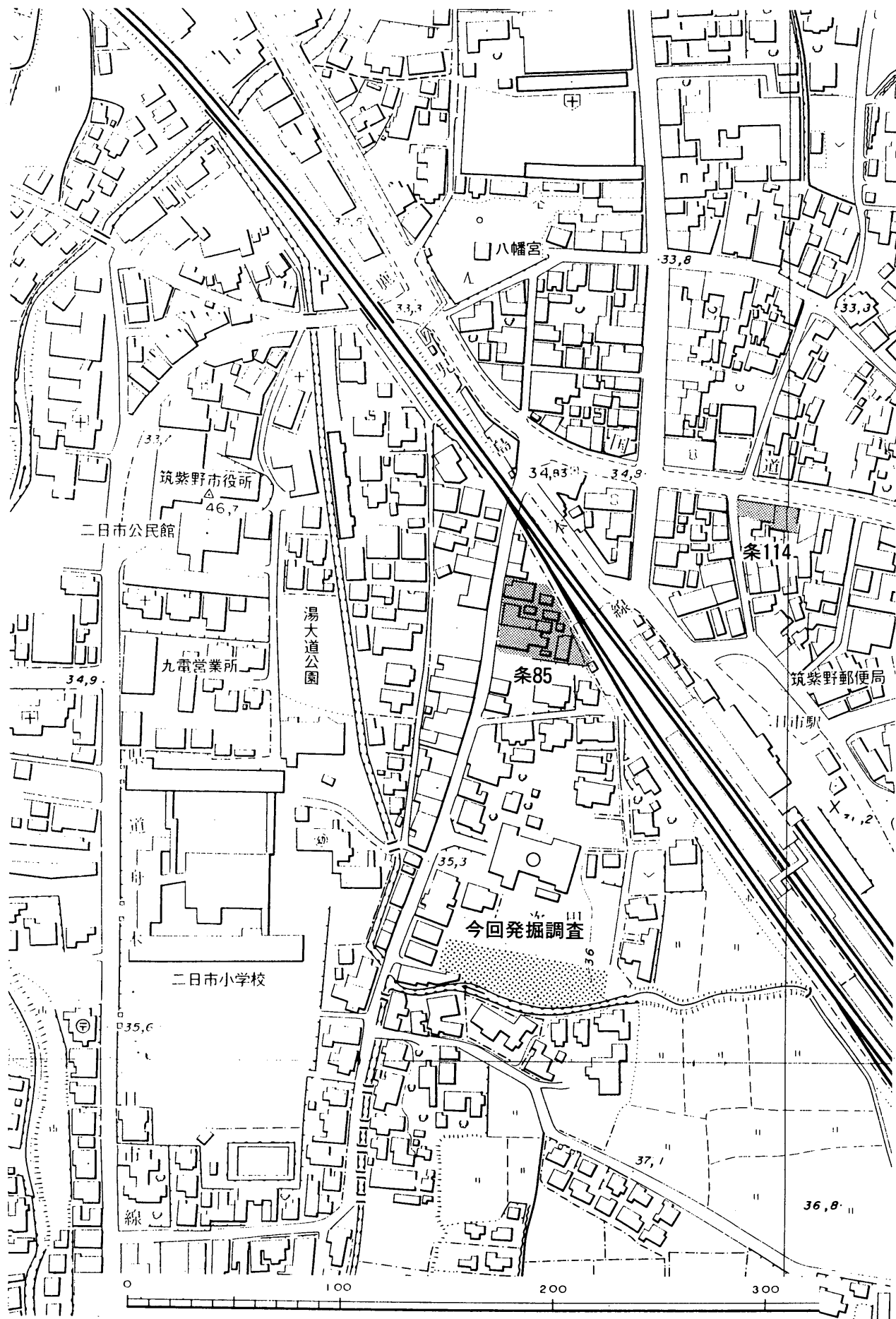
註1 大宰府条坊跡85次発掘調査 筑紫野市文化財調査報告書第28集 筑紫野市教育委員会 1991



第1図 堀池遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）

- | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|
| 01 大宰府条坊跡 | 02 大宰府政庁跡 | 03 井ノ尻遺跡 | 04 剣塚遺跡 |
| 05 杉塚廃寺 | 06 脇田遺跡 | 07 大坪遺跡 | 08 大門遺跡 |
| 09 唐人塚遺跡 | 10 前田遺跡 | 11 塔原遺跡 | 12 塔原廃寺 |
| 13 桶田山遺跡 | 14 武蔵寺跡 | 15 道場山遺跡 | 16 二日市宿 |
| 17 堀池遺跡 | 18 峯畑遺跡 | 19 通り浦遺跡 | 20 五穀神山遺跡 |
| 21 カケ塚遺跡Ⅰ | 22 カケ塚遺跡Ⅱ | 23 大曲り遺跡 | 24 針摺遺跡 |
| 25 野黒坂遺跡 | | | |

第1図 堀池遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）



第2図 堀池遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）

Ⅲ 調査の内容

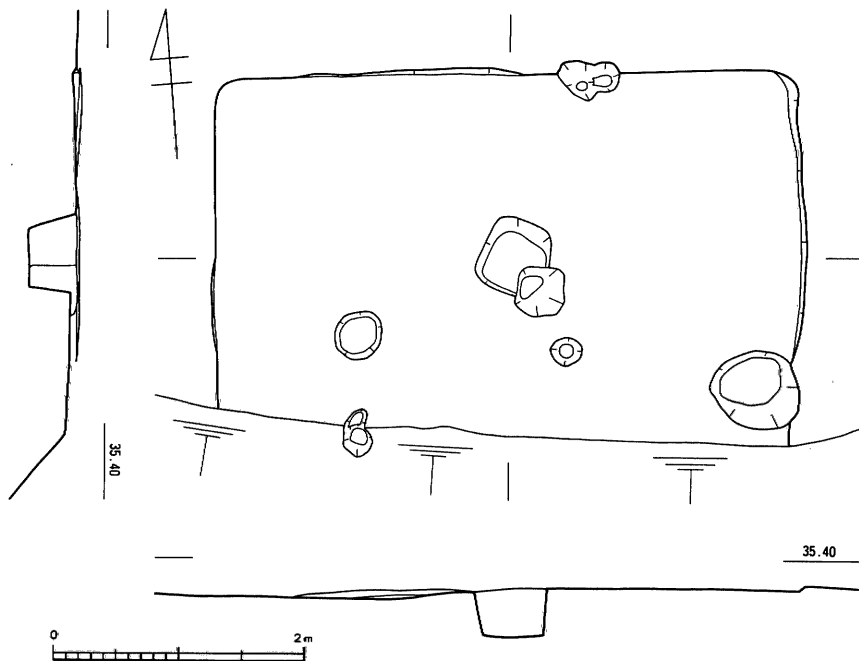
1. 調査概要

調査区の南側は遺構検出面から40～80cm程、低くなっており、その先に小河川が流れる。この面からは遺構は検出されなかった。段落ちの直下には浅い溝が巡り、やや砂質を帯びた青灰色の埋土から水田を比較的新しい時期に埋め立て全体を平坦にしたものと思われる。この部分を除く全面から遺構は検出されたが、総じて削平をかなり受けているようで、遺構の残りは悪い。

2. 竪穴式住居跡

(1) 1S I 0 1 0 (第3図 図版3)

調査区中央南端で検出した方形プランの竪穴式住居跡である。遺構の残りは極めて悪く、部分的に壁体が残るが、南側の一边は失われる。規模は東西4.7mを測り、南北2.5mが遺存する。検出部分中央に一边50cm余、深さ35cmの略方形のピットが認められるが、その他のピットは深さ10cm程度の浅いもので、主柱穴は確認できない。

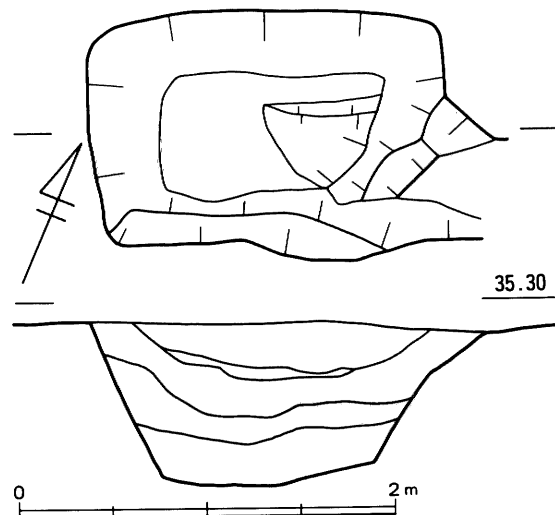


第3図 1S I 0 1 0 実測図 (縮尺1/60)

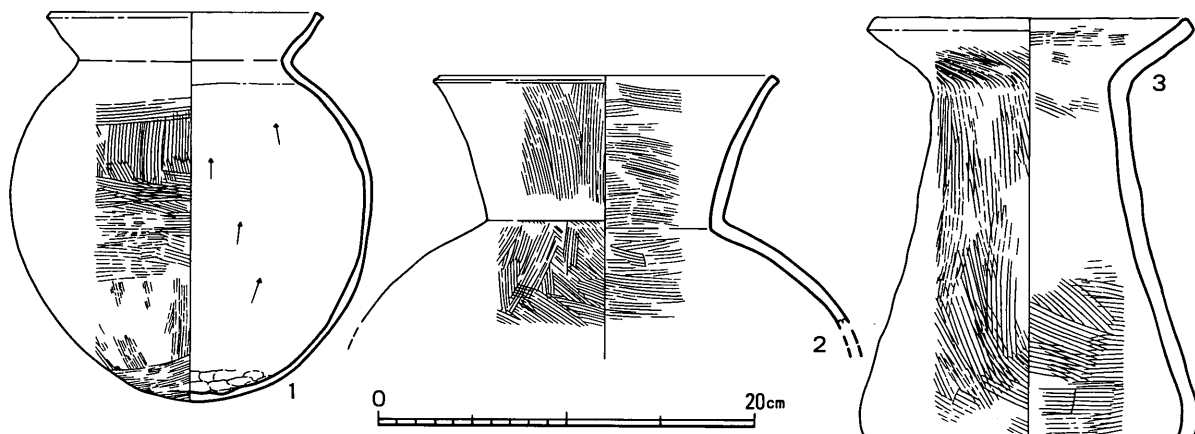
3. 土 墳

(1) 1S K 0 0 1 (第4図 図版3)

調査区の東端北側で検出した190cm×130cm、深さ85cmを測る長方形プランを呈する土墳である。主軸方位はN-67°-Eにとる。土墳の北隅から1S D 0 0 3が延びる。この1S K 0 0 1と1S D 0 0 3は連続する遺構と考えられる。床面は55cm×30cmの略長方形を呈し、溝状遺構が取付く下部が僅かな高まりをもつが、全体的にはほぼ平坦な床面を呈す。



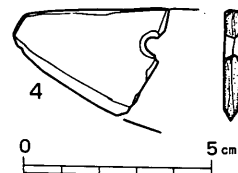
第4図 1S K 0 0 1 実測図 (縮尺1/40)



第5図 1SK001 出土土器実測図 (縮尺1/4)

遺物 (第5・6図 図版10)

1はいわゆる布留形甕である。口径15.4cm、胴部最大径19.5cm、器高20.9cmを測り、若干の破片が不足するが、ほぼ完形に復元しえた。口縁部は内弯気味に外傾して立ち上がり、端部は僅かに肥厚する。体部は球状を呈す。口頸部は内外面ともヨコナデされ、外面体部は縦方向に刷毛目が施され、さらに横方向の刷毛目が肩部と胴部最大径位に施される。底部は一方向からの刷毛目で処理される。内面は頸部から1.5cmほど下がった位置から体部全体にヘラ削りが行われ、底部は指頭痕が残る。外面体部上半には煤が付着し、内面体部は器面がやや荒れている。2は3層から出土した肩部から口縁部にかけての壺の破片で、口径18.2cmを測る。口頸部は外反気味に外傾して立ち上がり、端部は僅かに肥厚する。肩部は張る。外面は口頸部、肩部ともに縦方向、内面は横方向の刷毛目調整される。色調はにぶい褐色を呈す。3は器台で1/2近くを欠失する。受け部径17.4cm、脚裾径18cm、器高20.2cmを測る。脚部は器高の80%を占め、直線的に開く。裾端はやや内弯、または垂直に下る。受け部は短い、大きく開き、径は脚裾径とあまり変わらない。調整は外面を縦方向、内面は横方向の刷毛目を基調とする。色調は浅黄橙色を呈す。4は砂質凝灰岩製の石包丁で、両刃の半月形外弯刃である。両側から穿たれた径4mmの孔の部分から折れた小片である。



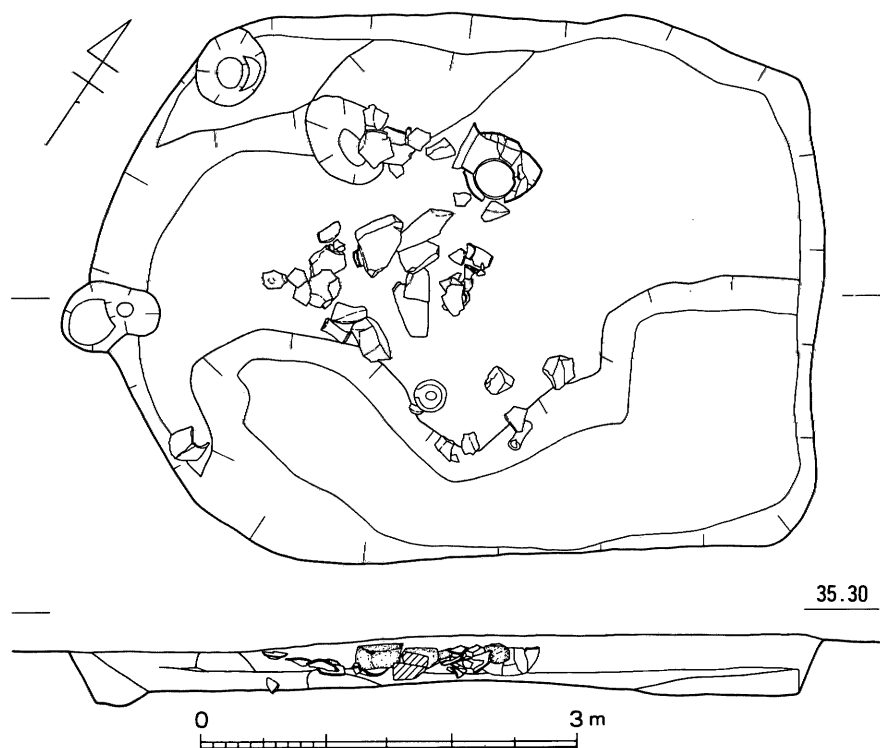
第6図 1SK001 出土土器実測図 (縮尺1/2)

(2) 1SK004 (第7図 図版4)

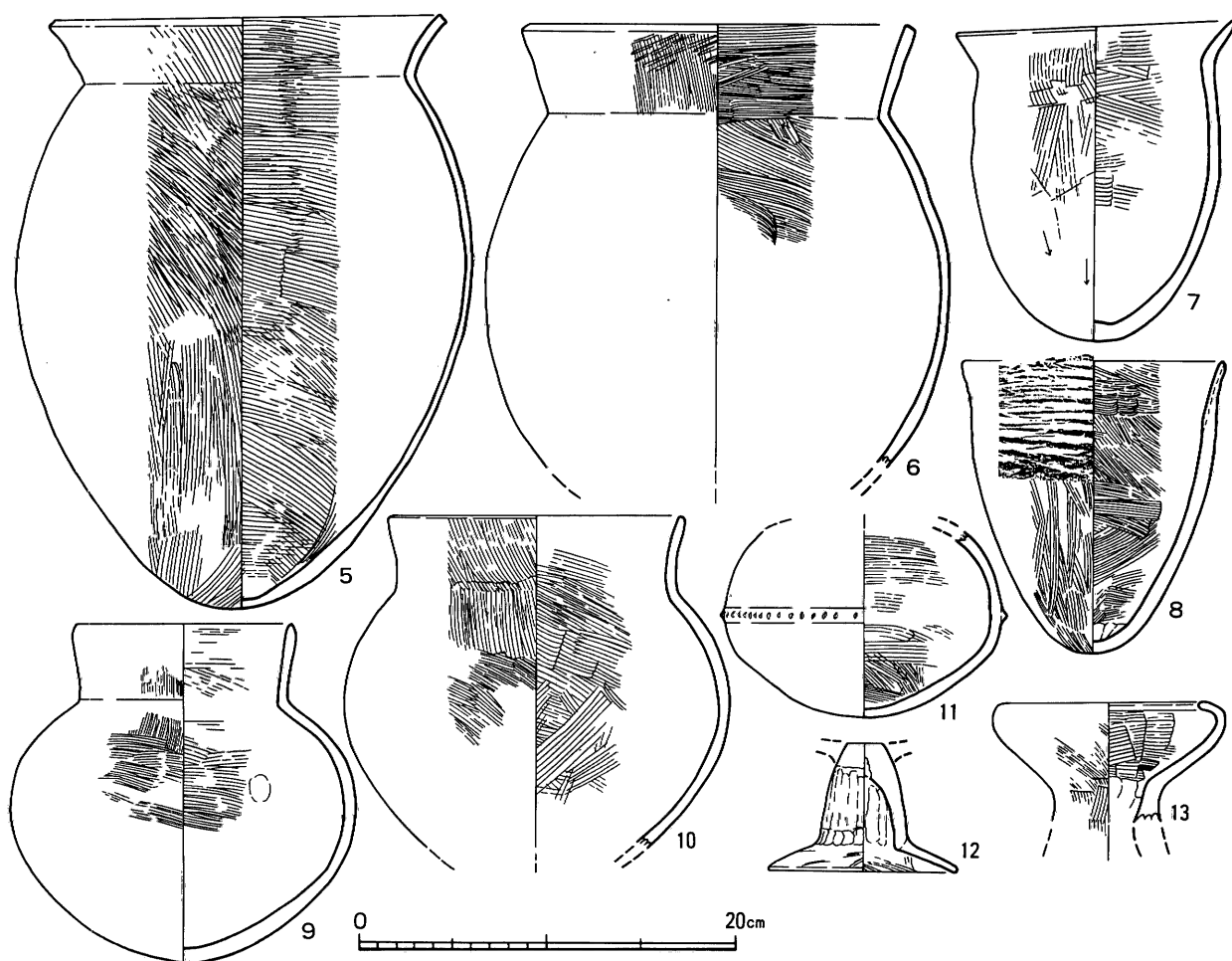
2.9×2.15mを測る長方形の一边が丸みをもつプランを呈す。削平により壁高は約15cm程が残る程度である。床面から僅かに浮いて遺物が数多く出土した。主軸はN-56°-Eにとる。

遺物 (第8図 図版10・11)

5は長胴の甕で1/4程が欠失する。口縁部は外弯気味に外傾し、最大径は胴部中位やや上方にある。底部は砲弾状にすぼまる。口径21.2cm、最大径24.4cm、器高31.6cmを測る。調整は内外面ともに刷毛目で仕上げられる。外面は上半を斜方向、下半は垂直方向に施される。内面は上半を横方向、下半はやや下に傾いて施される。また、下半部には若干の煤が認められる。6は1/4程の甕の上半部片である。口縁部は外傾して立ち、最大径は胴部中位付近にもつと思われる。口径21cm、最大径24.7cmを測る。外面はタタキが施され、口縁部はさらに刷毛目調整される。下半部は明確でないが、



第7図 1SK004実測図 (縮尺1/60)

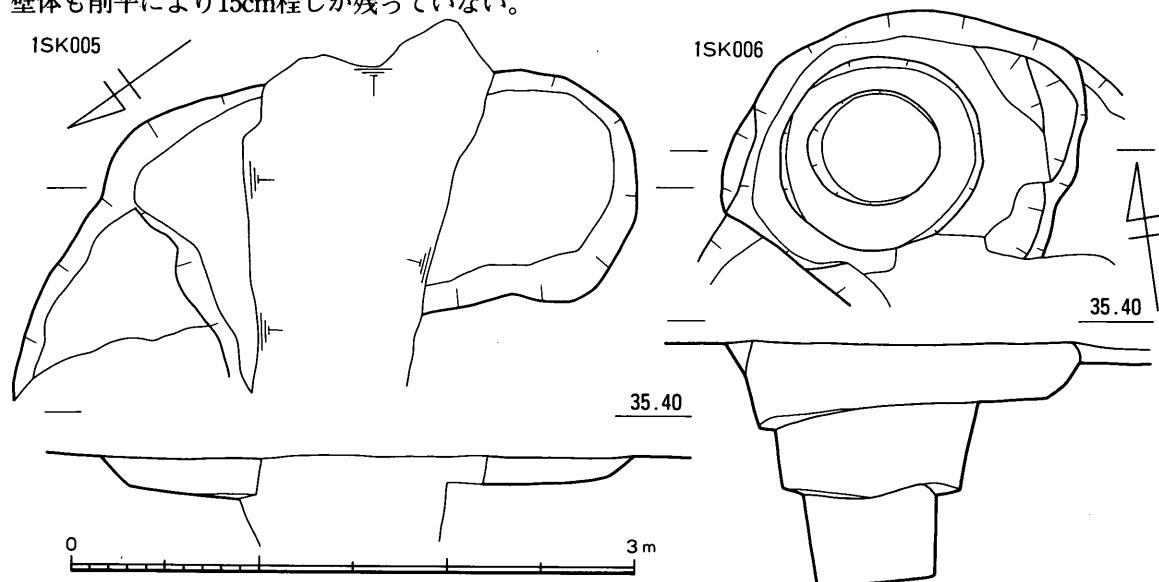


第8図 1SK004 出土土器実測図 (縮尺1/4)

浅い刷毛目を粗く施しているようである。7・8は小型の甕である。7は口径14.8cm、器高17cmを測る。口縁部は短く外傾し、胴部はほとんど張らず、ゆるやかにすぼまり丸底の底部へ至る。外面は縦方向の刷毛目が施され、胴部はさらにヘラ削りされる。内面は横方向の刷毛目で仕上げられる。8は1/2程の遺存で、口径14cm、器高15.6cmを測る砲弾形を呈する。内外面ともに刷毛目が施され、さらに外面上部1/3にはタタキを施す。9・10は短頸壺である。9は約1/2が遺存し、口径12cm、器高18cmを測る。口縁部は僅かに外傾し、胴部最大径は中位上部にもち、18.4cmを測る。内外面ともに刷毛目が施され、さらに外面下半はヘラ削りされる。10は約1/3が遺存し、口径15.8cm、胴部最大径20.5cmを測る。形態、調整方法ともに9と酷似するが、9に比べ口縁部と胴部の屈曲部はややあまく、胴部の張りも弱い。11は長頸壺であるが、口頸部は欠失する。体部はやや偏平な球状を呈し、最大径位に断面三角形の刻目凸帯を巡らす。底部はレンズ状を呈すが胴部との境は明瞭でない。調整は全体に磨滅が著しいが、内面は横方向の刷毛目が施される。12は高坏の脚部で、広がり弱い筒部から裾部は大きく開く。筒部外面にはミガキが施され、裾部は内外面とも粗い刷毛目で調整される。13は器台の受け部で、強く内弯し袋状を呈す。調整は刷毛目が施される。

(3) 1SK005 (第9図 図版4)

1SK004の北西2mで検出した長楕円形プランの土壌である。中央部や北側は攪乱等を受け、壁体も削平により15cm程しか残っていない。



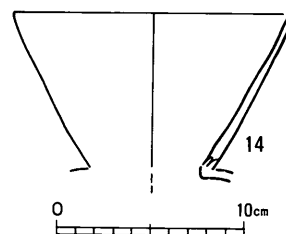
第9図 1SK005・1SK006実測図 (縮尺1/40)

(4) 1SK006 (第9図 図版4)

1SK005の北隣で検出したもので円筒状に3段を掘り抜かれ、深さ13mを測る。

遺物 (第10図 図版11)

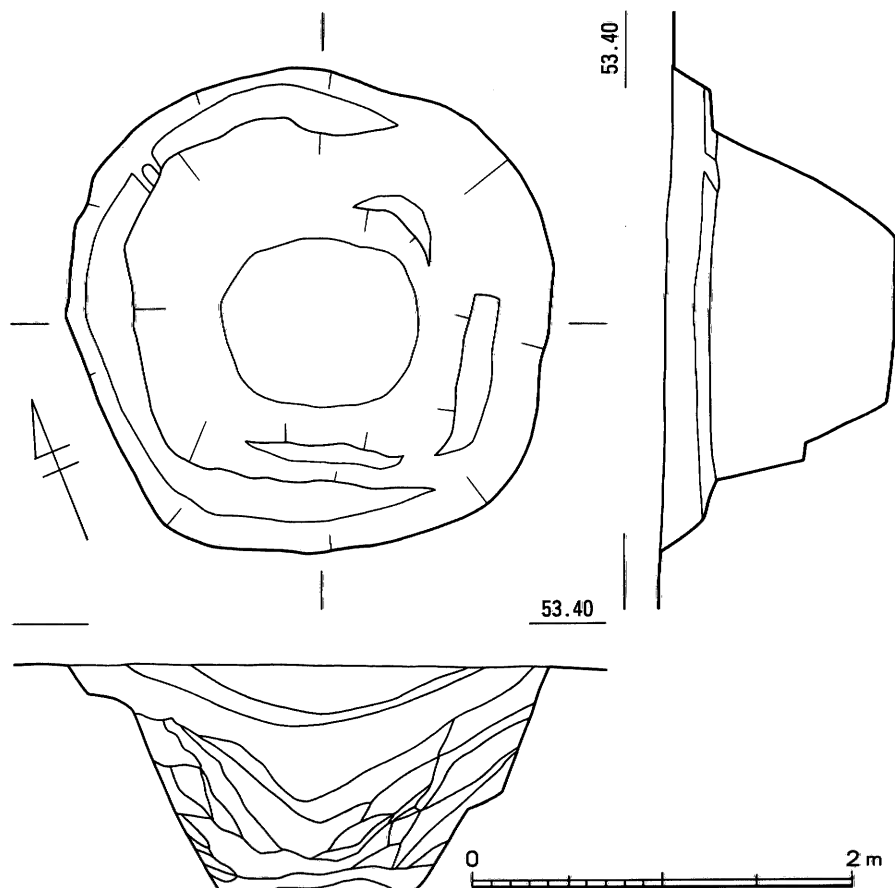
14は長頸壺の口頸部で、1/3程が遺存する。口径15cm、口頸部の高さは8.2cmを測る。器面は磨滅し、調整は不明瞭であるが。色調は橙色を呈し、良質の粘土を使用している。



第10図 1SK006
出土土器実測図 (縮尺1/4)

(5) 1SK007 (第11図 図版5)

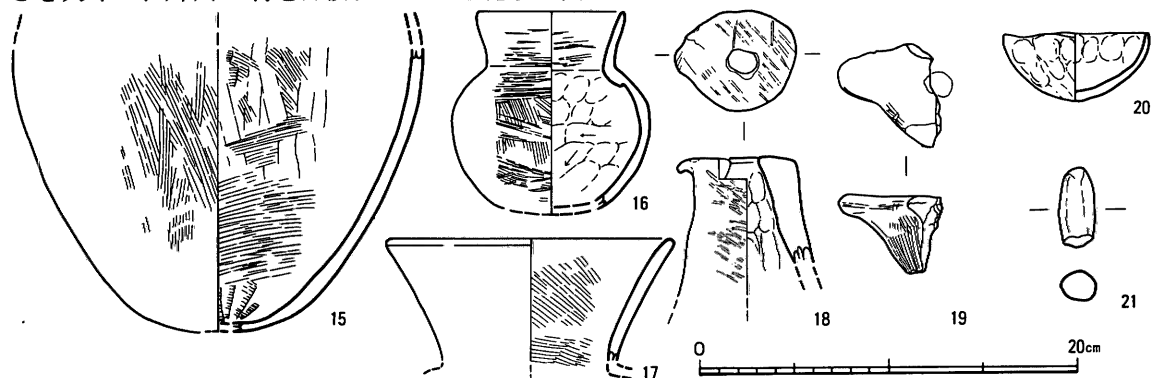
1SK006の北西で検出した。2.6×2.5mの丸味が強い方形を呈す。遺構面から20～30cmの部分に短い段を有し、すぼまりながら1～0.9mの略円形の床面へ至る。埋土の東西断面観察では中央部に1～1.2m大の掘込みがあったようである。



第11図 1SK007実測図 (縮尺1/40)

遺物 (第12図 図版11)

15は長胴の甕の下半で、底部は丸底である。調整は内外面とも刷毛目が施される。16は小型丸底壺で1/2程を欠失する。口径7.9cm、胴部最大径10.5cm、底部は欠失するが、器高は11cm程度と推定される。口頸部高3cmで、器高に占める割合は約27.2%である。調整は全体に磨滅が著しいため明確さを欠くが、外面は刷毛目後、ミガキを施す。内面は口頸部にミガキが認められ、胴部下半はヘラ

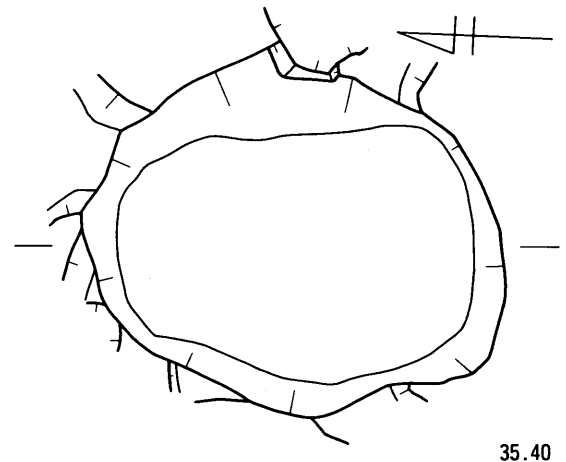


第12図 1SK007出土土器実測図 (縮尺1/4)

削りされる。色調はにぶい黄褐色を呈す。17は壺の口頸部で、口径15.3cmを測る。外面から内面口唇部にかけて丁寧なヨコナデで仕上げられるが、内面には刷毛目が残る。18・19は杓形器台である。18の受け部は平坦で、つまみの部分は薄く、短く引き出される。頂部の孔は1.2~1.5cmを測る。外面は全体にタタキが残る。19は受け部のつまみ部分の破片である。受け部のつまみは脚部から外弯して取り付けられたしっかりとしたものである。20は手づくねの鉢で口径7.5~8.1cm、器高3.4~3.7cmを測る。器面には指頭痕が多く残る。21は土鍾状の土製品で、断面は径1.8~1.6cmの不整円形を呈す。

(6) 1SK008 (第13図 図版5)

調査区の中央で検出した土壌である。縁辺部はピット等に切られるが、2.3~1.9mの不整円形プランを呈す。壁体は約65cmを測り、ほぼ真っすぐに落ちる。床面は平坦な、1.9~1.3mの不整楕円形プランを呈す。



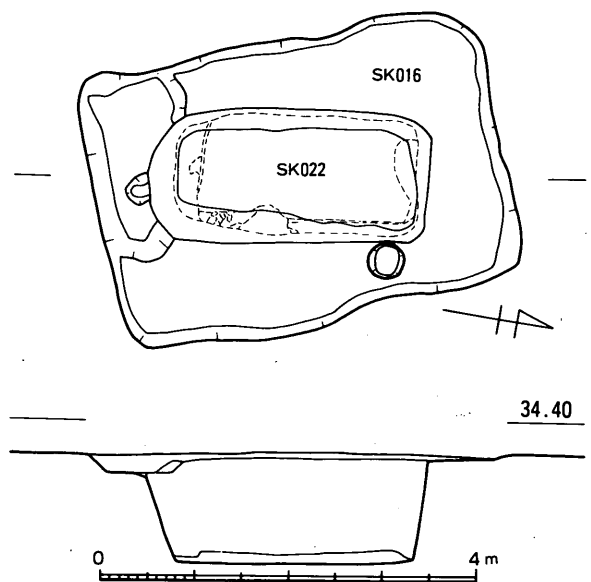
第13図 1SK008実測図 (縮尺1/40)

(7) 1SK016 (第14図 図版6)

調査区の西部で検出した約2.3×1.5mの方形プランの土壌である。中央部は1SK022に切られていると考えられるが、1SK016の残りが悪く明確さを欠く。南隅は約6cmの掘込みをもつ。

遺物 (第15図 図版11)

22はいわゆる布留形甕である。口径15.7cm、胴部最大径18cmを測り、底部を僅かに欠失するが、器高は20.2cm程度と考えられる。外傾する口縁部は内弯して立ち上がり、端部はあまく内側に跳ね上げられる。体部は球形に近い卵形を呈す。口頸部は内外面ともヨコナデされる。体部外面は煤の付着や磨滅により明瞭さを欠くが、上半は横方向の細かい刷毛目が施され、さらに肩部には櫛書による3条の波状文が肩部を巡る。またこの周囲部分には横方向の刷毛目の下から斜方向の刷毛目が僅かに確認される。内面は器面がかなり荒れているが、頸部から1cmほど下がった位置からヘラ削りが行われ、底部は指頭痕が残る。23は鉢の1/2足らずの破片である。口径14.4cm、器高7.6cm程度と考えられる。色調はにぶい褐色を呈し、内面は比較的丁

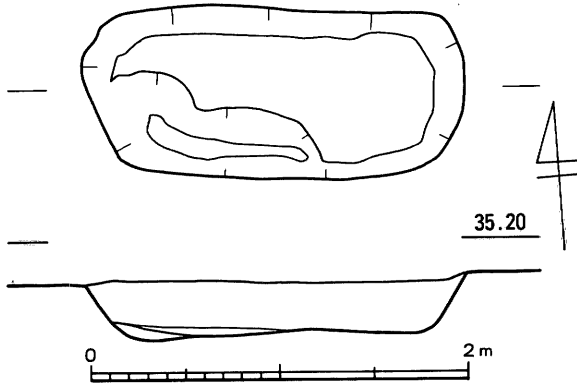


第14図 1SK016・1SK022実測図 (縮尺1/80)

寧なナデで仕上げられるが、外面口縁部から2cmあまり下から施されるヘラ削りは粗い。

(8) 1SK017 (第16図)

調査区の西端で検出した2～0.9mの楕円形プランを呈す土壌である。壁高は約30cmを測り、床面は中央から東西に浅い傾斜をもち、南西部はさらに掘り窪められる。



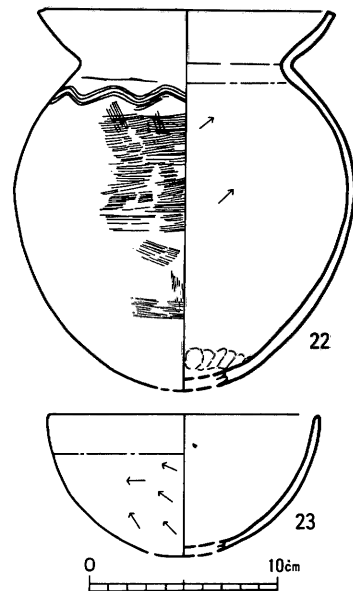
第16図 1SK017 実測図 (縮尺1/40)

遺物 (第17図)

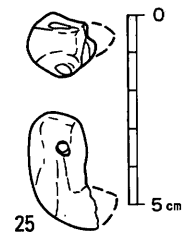
24は青磁の合子で、立ち上がり部分を欠失する。最大径5.9cm、高台径3.7cmを測り、高台の内側は浅く削られる。釉はオリーブ灰色を呈し、内外面全体に丁寧に施釉される。



第17図 1SK017出土青磁実測図 (縮尺1/2)



第15図 1SK016出土土器実測図 (縮尺1/4)



第18図 1SK022出土土製品実測図 (縮尺1/2)

(9) 1SK022 (第14図 図版6)

1SK016と切り合いをもつ1.5×0.7mの略長方形プランを呈す土壌である。壁高は55cmを測り、平坦な床面から5cm程度まで炭が詰められている。

遺物 (第18図)

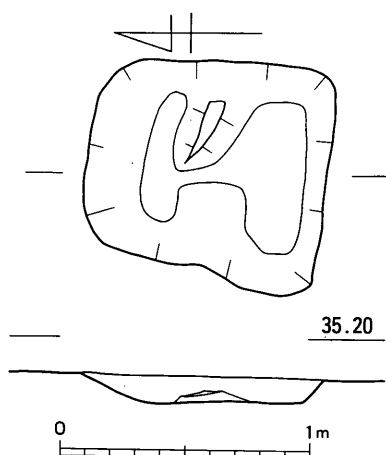
25は土製の勾玉で、尾部を欠失する。頭部には直径2mmの孔が穿たれている。

(10) 1SK023 (第19図)

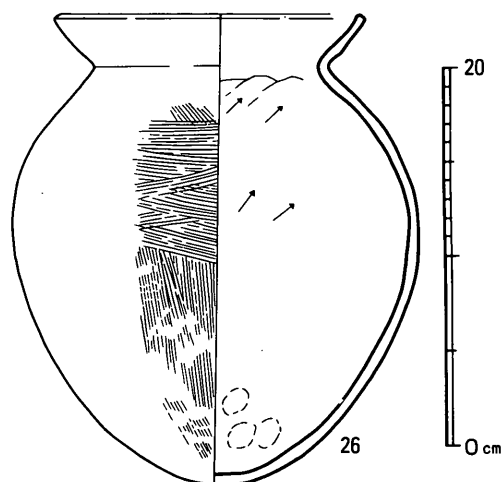
調査区中央より西寄り、段落ち近くで検出した。一辺1m足らずの略方形プランの土壌で、床面付近が残る程度である。床面は中央東西から僅かに高い部分が張りだし、平坦面はH状を呈す。

遺物 (第20図 図版12)

26はいわゆる布留形甕である。口径16.4cm、胴部最大径21.5cm、器高25cmを測り、若干の破片を不足するが、ほぼ完形に復元しえた。外傾する口縁部は内弯して立ち上がり、端部はあまく内側に跳ね上げられる。体部は卵形を呈す。口頸部は内外面ともヨコナデされ、外面体部は縦方向に細かい刷毛目が施され、さらに横方向の刷毛目が肩部から胴部最大径位にかけて施される。底部は一方



第19図 1SK023実測図 (縮尺1/30)



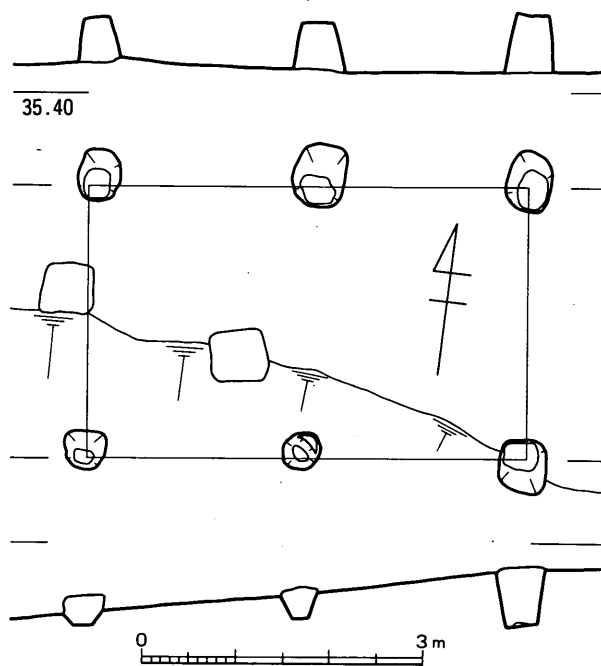
第20図 1SK023出土土器実測図 (縮尺1/4)

向からの刷毛目で処理される。内面は頸部から0.5cmほど下がった位置から体部全体にヘラ削りが行われ、底部は指頭痕が残る。外面体部上半には煤が付着し、内面体部は器面がやや荒れている。

4. 掘立柱建物

(1) 1SB018 (第21図 図版7)

調査区の段落ち部で検出した、南北1間(約2.9m)、東西2間(4.7m)の東西建物である。建物の南北軸は $N-6^{\circ}30'$ Eを測る。柱穴は50~60cm前後の略方形を呈し、底は標高35.6m前後のレベルに収まる。



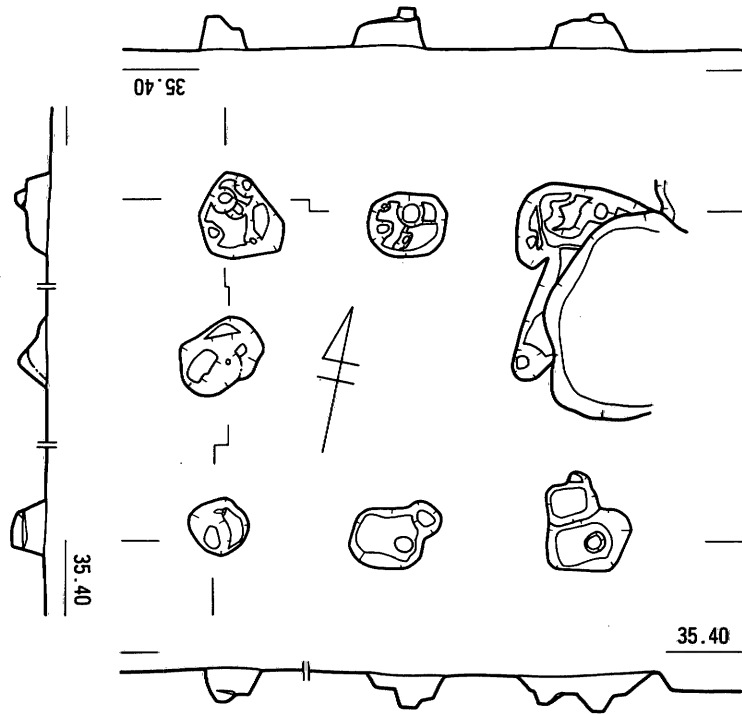
第21図 1SB018実測図 (縮尺1/80)

(2) 1SB019 (第22図 図版7)

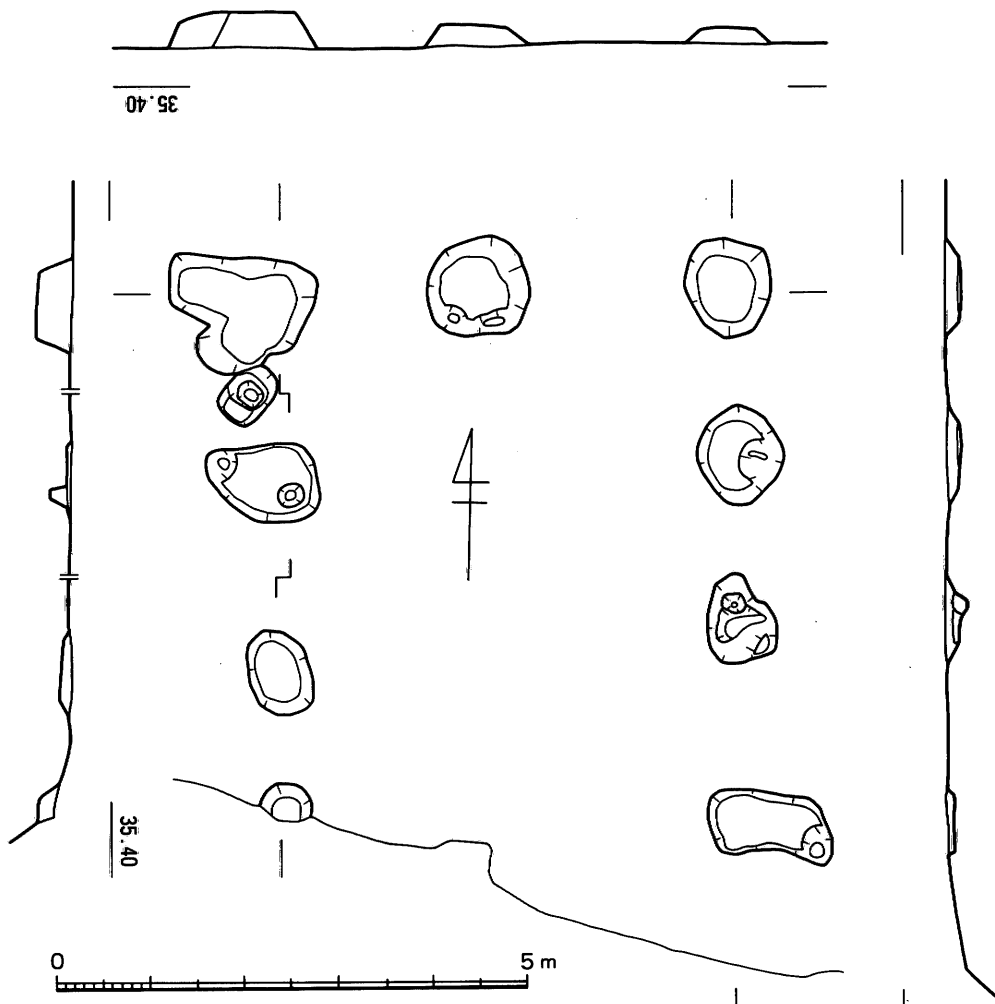
1SK008と切り合いをもつ、南北2間(約3.6m)、東西2間(約4m)の建物である。建物の南北軸は $N-11^{\circ}30'$ Eを測る。柱は径15cm程度と推定され、柱穴の底は標高35.8m前後のレベルに収まる。

(3) 1SB024 (第23図 図版7)

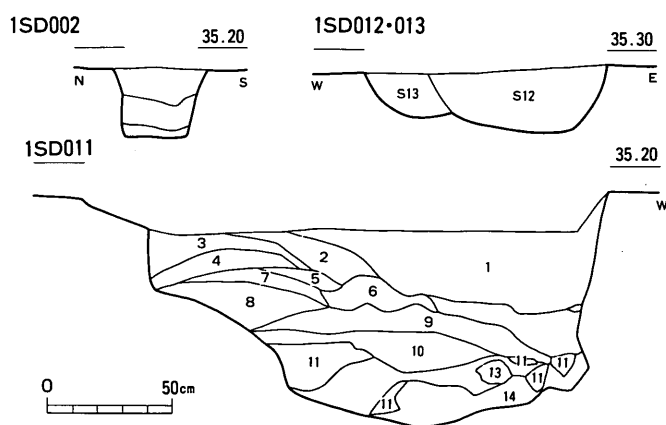
調査区の南西隅で検出した南北建物で、建物の南北軸は $N-1^{\circ}10'$ Eを測る。東西は2間(約3.8m)であるが、南北は3間(約5.5m)を確認したが、さらに調査区外に延びると考えられる。柱穴の遺存度は悪い。



第22図 1SB019実測図 (縮尺1/80)



第23図 1SB024実測図 (縮尺1/80)



1SD011 土層観察一覧表

- 1 10Y R3/1 黒褐色土層
- 2 10Y R4/2 灰黄褐色土層で極めて粒子が細かい(0.1ミリ以下)。
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色砂層で極めて粒子が細かい(0.1ミリ以下)。
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂質土層で砂は極小粒である。
- 5 10Y3/2 黒褐色砂質土層で極めて粒子が細かいが、若干極小粒の砂を含む。
- 6 10Y R2/1 黒色土層
- 7 10Y R6/1 褐灰色砂層で砂は小粒である。
- 8 10Y R4/3 におい黄褐色砂層で、砂は極小を中心に小粒も含むものである。
- 9 10Y R5/1 褐灰色砂層で砂は極小粒である。
- 10 10Y R5/4 におい黄褐色砂層で砂は極小である。
- 11 7.5Y R17/1 黒色土層
- 12 10Y R5/3 におい黄褐色砂層で砂は小〜極小粒で構成される。
- 13 10Y R4/2 灰黄褐色土層で極めて粒子が細かい。2に類似するが若干色調が暗く、さらに粒子が細かい。
- 14 10Y R4/3 におい黄褐色砂層で、砂は2〜3cmの極小粒で構成される。

(色記号は日本色研事業(株)発行「新版標準土色帖」1986.4による。)

第24図 1SD002・011～013実測図(縮尺1/30)

5. 溝状遺構

(1) 1SD002 (第24図 図版8)

調査区の北東端で、幅60cm、長さ4.5mを確認した。1SK001の東隅から延びた1SD002はN-69°30'-Eに主軸をとり、僅かな弧を描き延びる。断面は矩形を呈し、埋土は3層に分層され、最下層は黒色土の薄い埋土がある。

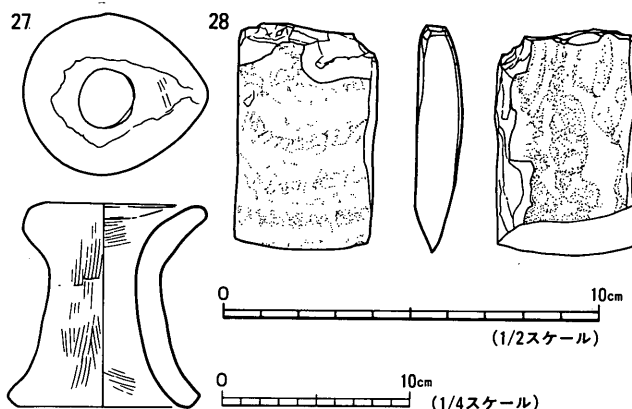
(2) 1SD011 (第24図 図版8・9)

調査区の中央部北側で検出した。幅2mを測り、北西方向に僅かな弧を描き延びる。南西部は床面まで約1mを測り、徐々に深くなっている。床面は凹凸が激しい。

遺物(第25図 図版12)

27は器台で1/2余りが遺存し、器高10.9cm、脚裾径10.2cmを測る。受け部は平面が尖り気味の卵形を呈し、受け部の先を内側に折り曲げ袋部を作る。筒部はヘラ状工具で仕上げられ、その他の部分は刷毛目が施される。28は砂質凝灰岩製の小形の石斧である。ほぼ完形で、長さ6cm、刃部幅3.6cm、厚さ1.2cmを測る。

腹側は平坦で、背は浅い弧を描くように作られ、側面も垂直におとされる。刃は両側から研ぎ出される。



第25図 1SD011出土土器・石器実測図(縮尺27=1/4・28=1/2)

(3) 1SD012 (第24図 図版9)

調査区の西部を南北に貫く溝状遺構で、幅70~90cm、深さは最も深いところで30cm程度である。

N-1°30'-Wに主軸を取り、直線的に延びる。

(4) 1SD013 (第24図)

1SD012の中程から西側に直角に延びる溝状遺構で幅50~60cmを測る。切り合いより1SD012より先行するが、その先端は重なるような形状を呈すことから、掘直しによることも考えられる。

(5) 1SD021

1SD013の東で検出した。南側はN-16°-Eに主軸をとり、北側にかけて緩やかに東側に弧を描く。南側段落ち部で幅65cm、深さ25cmを測り、徐々に浅くなる。

6. ピット (第26図 図版9)

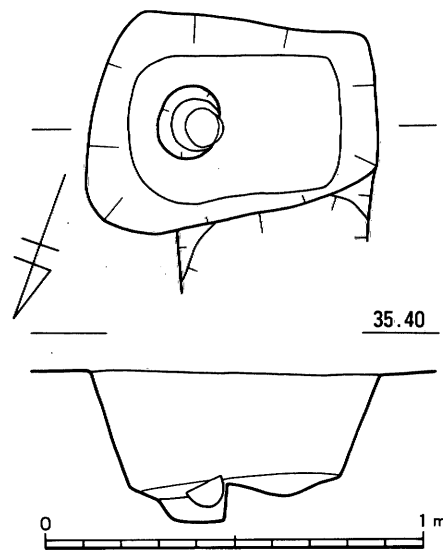
掘立柱建物の柱穴を含め約460個のピットを検出した。土壌とピットの区別については基準を明確にしえず、苦慮したものもあるが、単体で1mを越えるものは基本的に土壌とし、その基準に満たないものをピットとして扱った。

1SP249は75×60cm程の略方形プランを呈すピットである。床面は約55×40cmの隅丸方形を呈し、西側に径15cmの柱痕が残る。

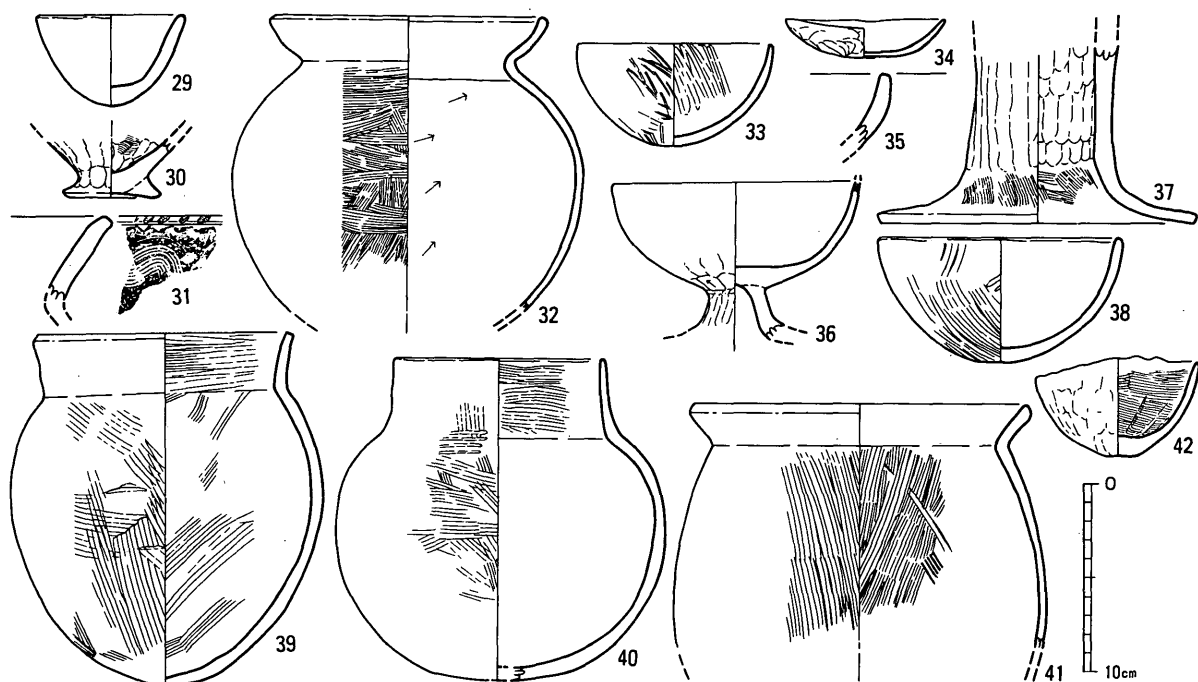
遺物 (第27・28図 図版12)

29は1SP154から出土した小形の鉢で、口唇部の1/2程を僅かに欠く。口径は7.8cm、器高4.9cmを測る。全体に丁寧なナデで仕上げられる。30は1SP229から出土した脚台で、鉢に取り付けられたものと思われる。脚裾径は5.2cmを測り、外面は指頭痕がのこる。31は1SP236から出土

した甕の口縁部片で、口唇部には刷毛状工具による刻みが施される。また、口縁部外面には櫛書波状文が巡らされる。32は1SP244から出土した。いわゆる布留形甕で、1/3程度が遺存するが、底部は欠失する。口径14.8cm、胴部最大径18.6cmを測る。外傾する口縁部は内弯して立ち上がり、端部はあまく内側に跳ね上げられ、体部は球状を呈す。口頸部は内外面ともヨコナデされる。体部外面は縦方向の刷毛目の後、上半は横方向の刷毛目が施される。また煤の付着が認められる。内面は器面がやや荒れているが、頸部から1cm足らず下がった位置からヘラ削りが行われる。33は1SP249の柱痕検出部直上から出土した土師器碗の完形品である。口径10.4cm、器高5.5cmを測る。外面は櫛状工具による調整が刷毛目のように施されている。内面は粗いミガキが巡らされる。34は1SP257から出土した手捏ねの土師器皿で、口径9.3~8.5cm、器高2.1cmを測る。指で丁寧に整形したようで、同心円状に指頭痕が3段にわたって巡り、口縁部のみヨコナデされる。35は1SP268から出土した鉢の口縁片で、外面にはナデの痕が強く残る。36は1SP291から出土した土師器の高坏で、脚部と口縁部の大半が失われる。口径は反転により推定すると13.2cmを測る。坏

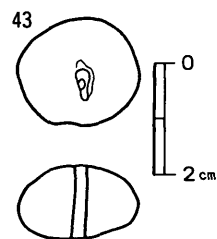


第26図 1SP249実測図 (縮尺1/20)



第27図 ピット出土土器実測図 (縮尺1/4)

部は内外面ともにミガキが施される。37は1 SP 3 2 8から出土した脚部で、器種は特定し得ない。ほぼ円筒状の筒部から大きく外反して開く。裾径は17~16.4cmを測り、色調は橙色を呈す。筒部の器壁は厚く、裾部は薄く仕上げられる。外面にはタタキ痕が残るが、筒部は丁寧にナデ消され、筒部と裾部の境部分は粗く刷毛目が施される。内面は筒部をヘラ状工具で整形した後、丁寧なナデを施し、裾部は刷毛目で調整される。38~40は1 SP 3 3 4から出土した。38は土師器碗で、口縁の一部が隣り合う1 SP 3 3 3から出土した。全体の1/5程を欠失するが、口径12.9cm、器高6.6cmを測る。外面は刷毛目により粗い調整が施されるが、内面は丁寧なナデで仕上げられる。39は甕で1割程度を欠失するが、口径13.7~14cm、器高18.1cm、胴部最大径16.6cmを測る。口縁部は僅かに外傾して立ち、胴部中位上方に最大径をもつ。底部は丸底を呈す。器壁は比較的厚手で、外面口縁部にヨコナデを施すほかは、粗い刷毛目を施す。40は直口壺で、1/3程が遺存し、口径11.2cm、器高17.5cm、胴部最大径17.1cmを測る。口縁部は短く直立し、体部は球状を呈す。口縁部と体部の境はあまい。外面はタタキの跡を刷毛目で消し、内面は丁寧なナデが施される。41は1 SP 3 3 5から出土した甕の破片で、口径は18.2cmを測る。口頸部は「く」字状を呈し、内外面口縁部はヨコナデ、胴部は刷毛目が施される。42は1 SP 3 9 8から出土した手捏ねの鉢で、約1/2を欠失する。外面は指頭痕が多く残り、内面は刷毛目が施される。43は1 SP 0 3 0から出土した土玉で、2.1~1.9cm、幅1.3cmを測り、中央に径2mmの孔を穿つ。



第28図 1 SP 0 3 0
出土土玉実測図
(縮尺3/4)

Ⅳ ま と め

今回の調査で時期を確定しえる遺物を出土した遺構は土壇といくつかのピットのみである。1SK001と1SK016からは布留形甕と在地系の土器が出土している。1SK004出土の土器はすべて在地のものであるが、いずれも丸底を呈し、底部と胴部の境目は失われている。また、甕の胴部下半にヘラ削りが施され、壺の口縁部も直立している。1SK007も布留形甕は出土していないが、小型丸底壺や杢形器台が出土しており、これらの遺構はいずれも古墳時代初頭、柳田康雄氏の三雲遺跡土器編年にあてはめると布留形甕にややⅡbに近い様相もあるが、胴部も完全な球形にまでは至っておらずⅡaの範中に収めてよいと考えられる。ピット出土の遺物でもこの時期のものはSP244、249、291、334などが上げられよう。今回調査地点の北側120mの大宰府条坊跡第85次発掘調査(以下条85と記す。)でも、この時期の竪穴式住居跡が検出されている。このことから周辺にはこの時期の集落跡が広がっていることが考えられるが、南側から西側にかけては小河川が回り込むようにして流れ、地形的に低くなっていることから、集落は北側から東側にかけて延びると推測される。1SI010は遺構の残りが極めて悪く、時期は確定できなかったが、その形状や周辺の遺構の状況から前述の時期の可能性はある。

掘立柱建物は建物の軸にバラツキがあるが、そのなかで1SB024はN-1°10'-Eと方位が整っており、また溝状遺構1SD012と概ね棟を平行にする。そのほか1SB019は2×2間としたが、1SP182、190が加わりさらに東側に1間延びる可能性があるが、北東端のピットについては留意して調査したが、検出しえなかった。また、柱間の間隔が整わなかったり、柱の通りがややずれていたため掘立柱建物として扱わなかったが、1SP201、203、206、207、226、228や、1SP234、295、298、475、476、477が建物になる可能性がある。

溝状遺構は条85ではSD012の延長部分は検出されなかった。条85との関係では条85SD03、条85SD05の形状は1SD011に類似するが、これらの関係は両調査区域の調査を待つ必要がある。

図 版



調査地点上空より水城・博多湾方向を望む



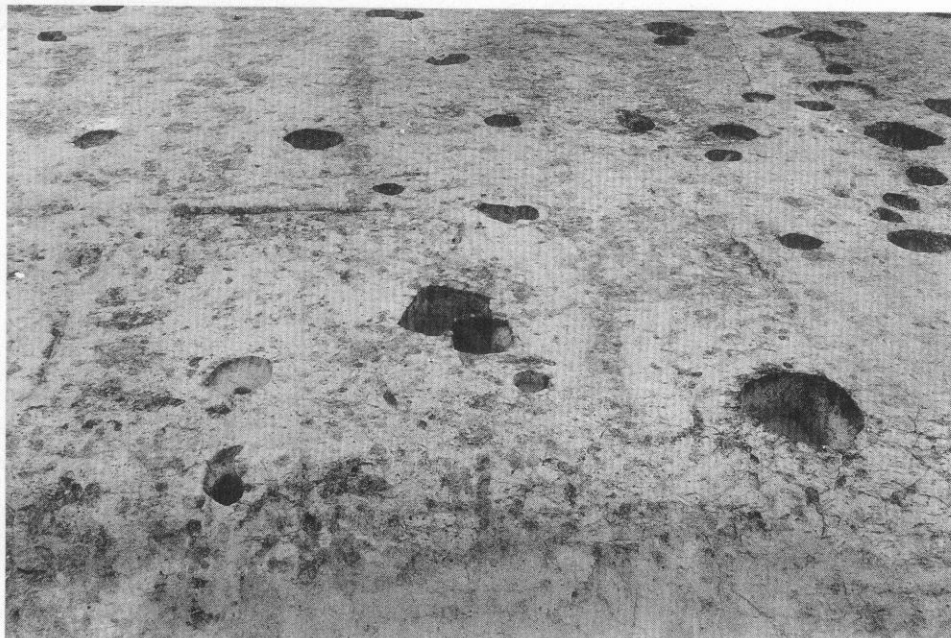
調査地点上空より基肆城方向を望む



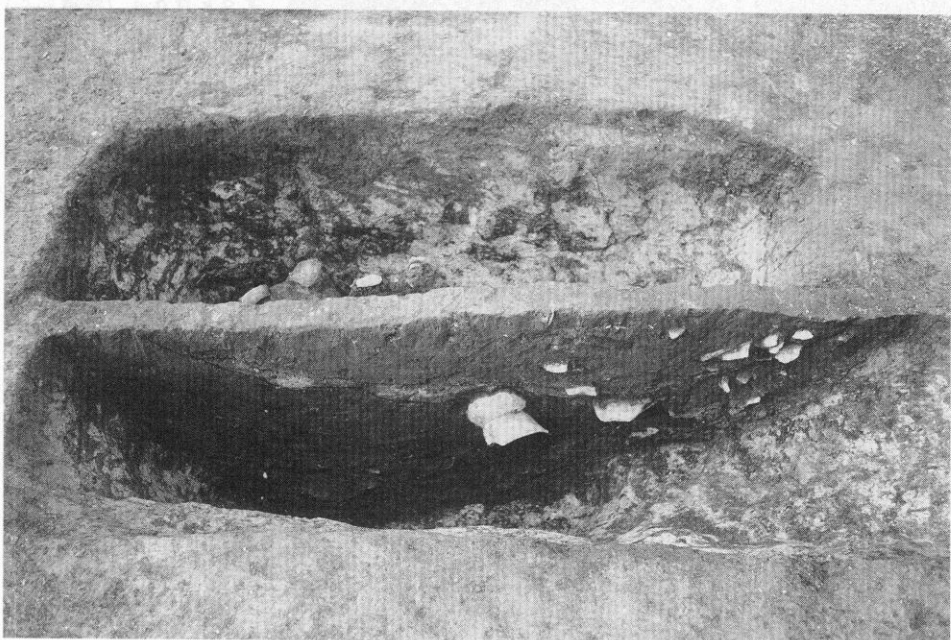
調査区全景（南より）



調査区全景（東より）



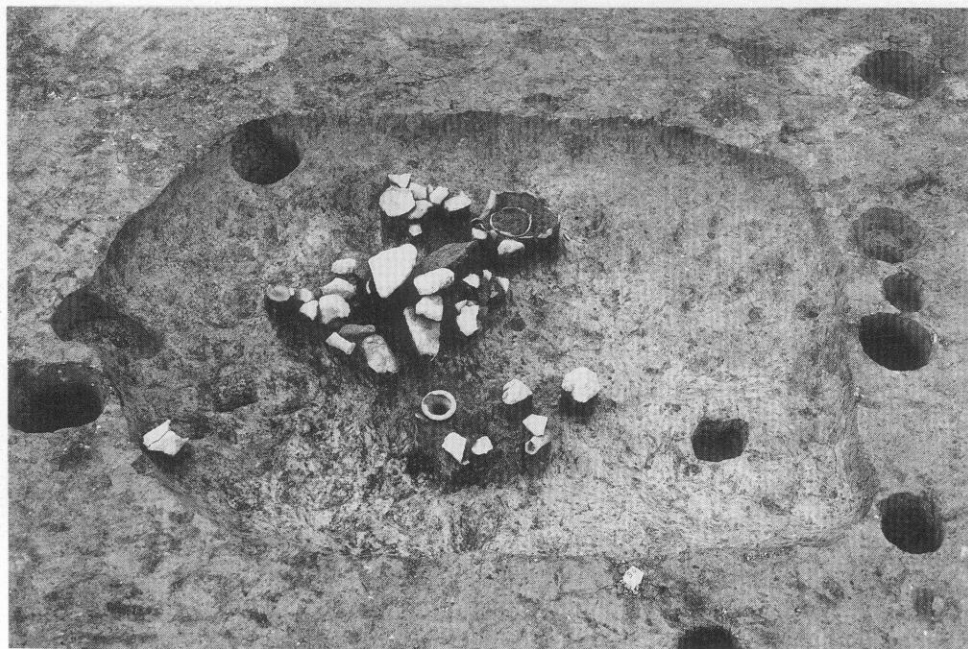
1SI010
(南より)



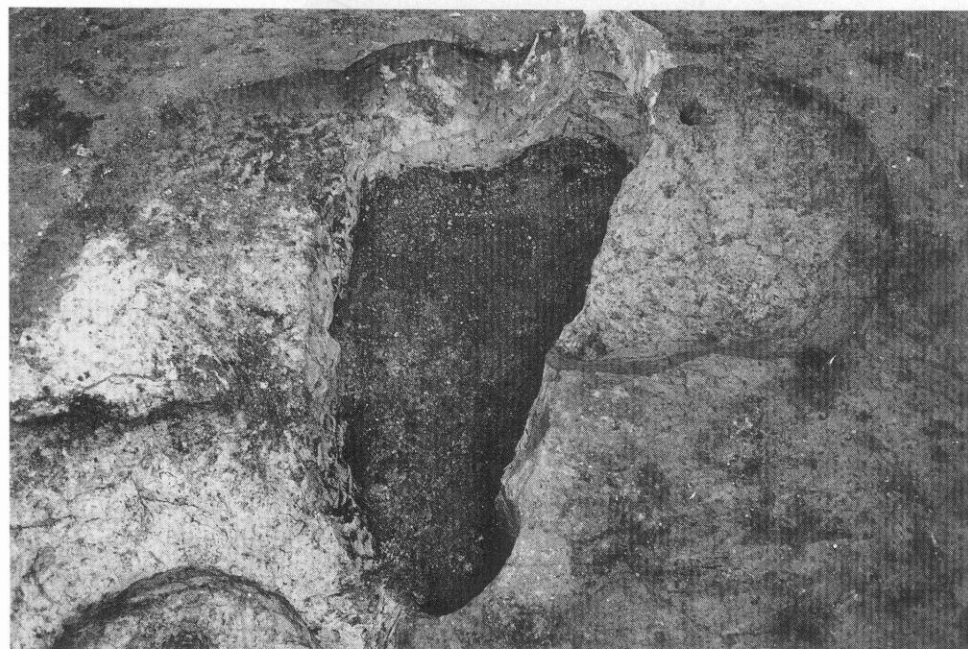
1SK001断面
(南東より)



1SK001
(南東より)



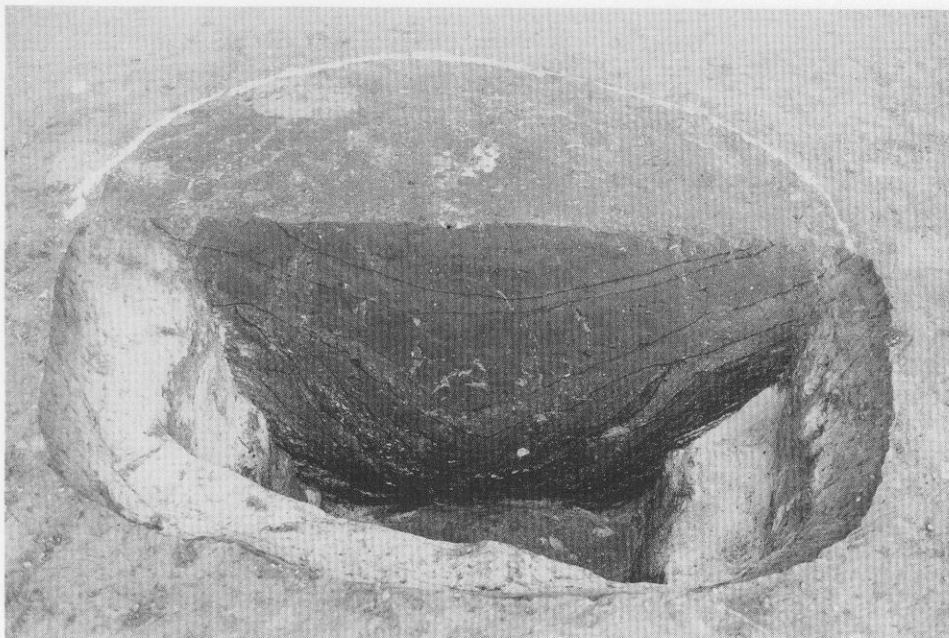
1SK004 (南東から)



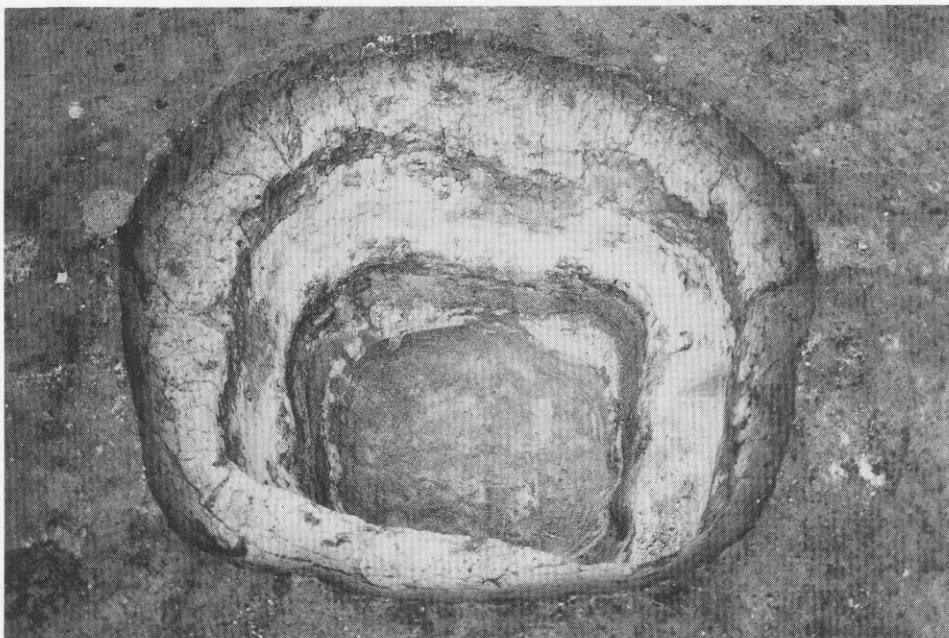
1SK005 (北西から)



1SK006 (南から)



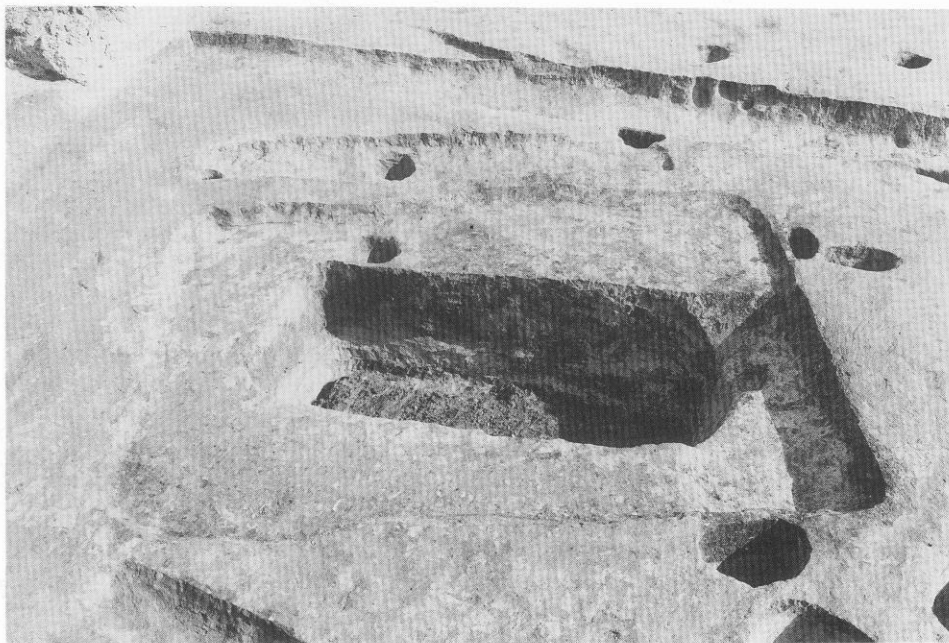
1SK007断面
(南から)



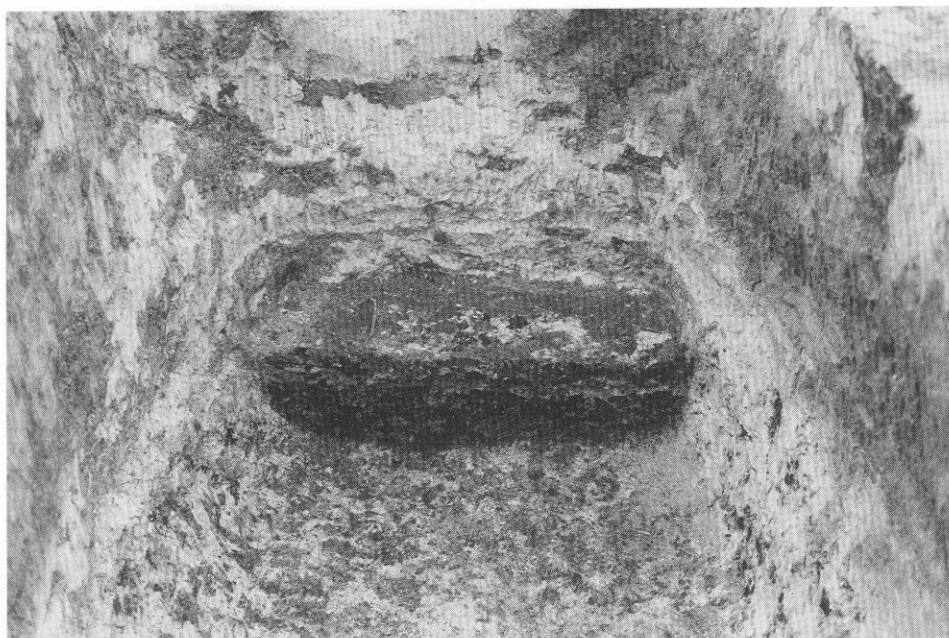
1SK007
(南から)



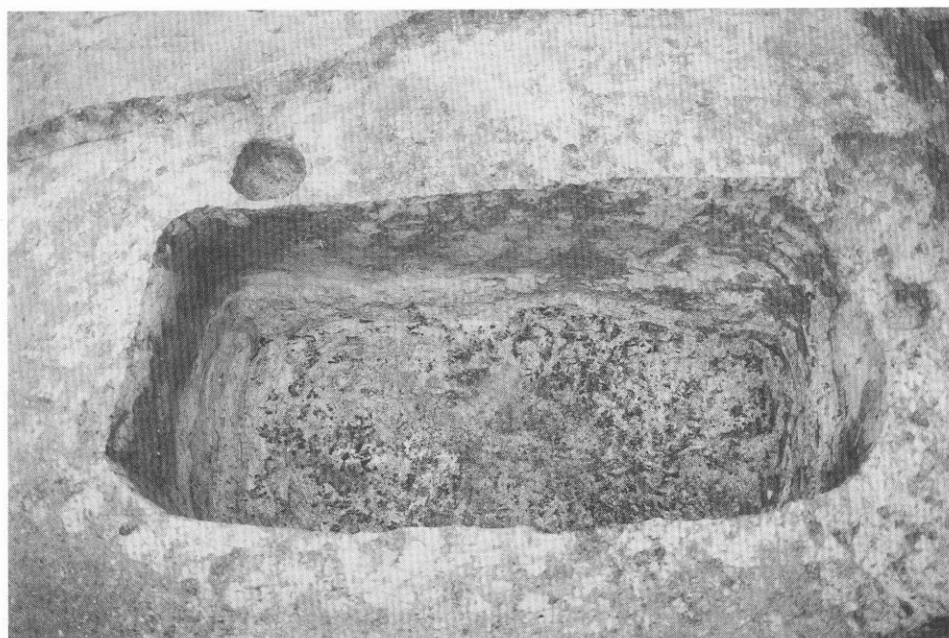
1SK008
(西から)



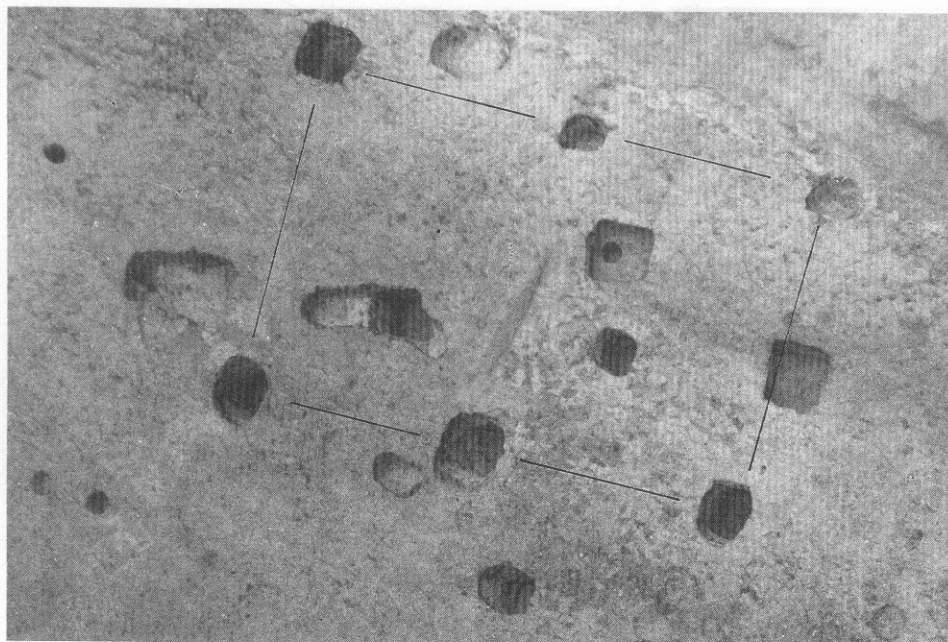
1SK016・022
(西から)



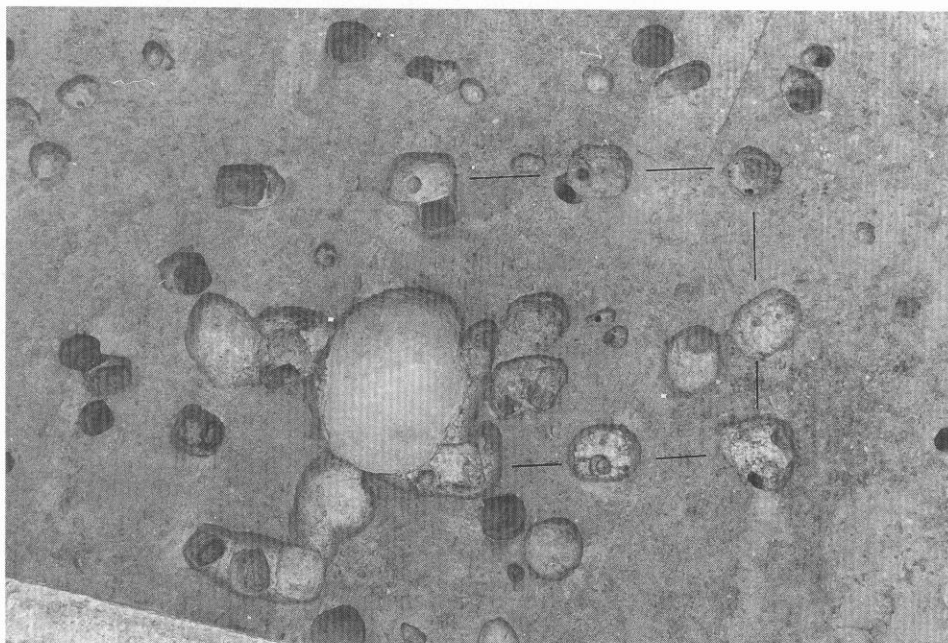
1SK022 炭埋置状況
(南から)



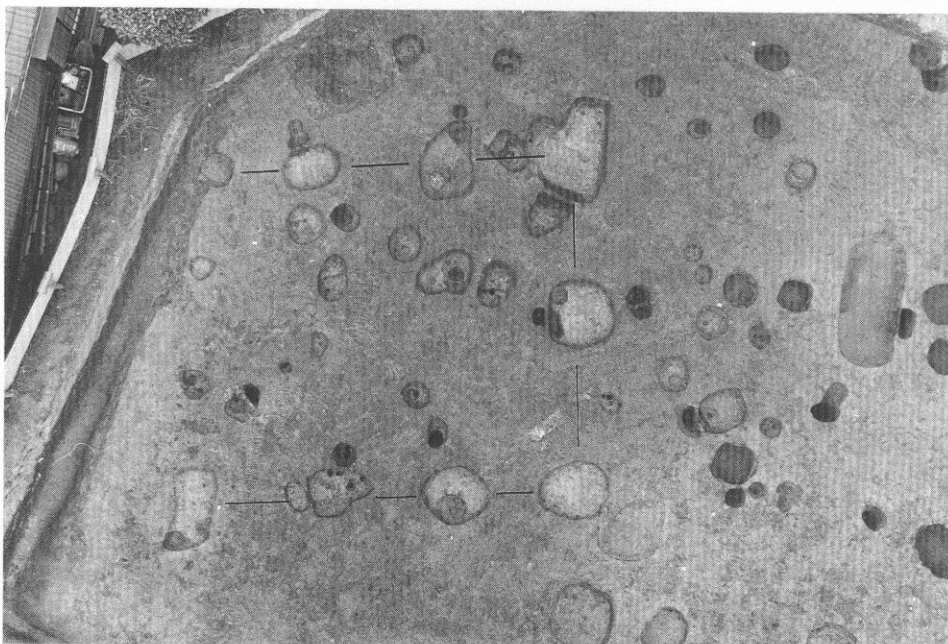
1SK022
(西から)



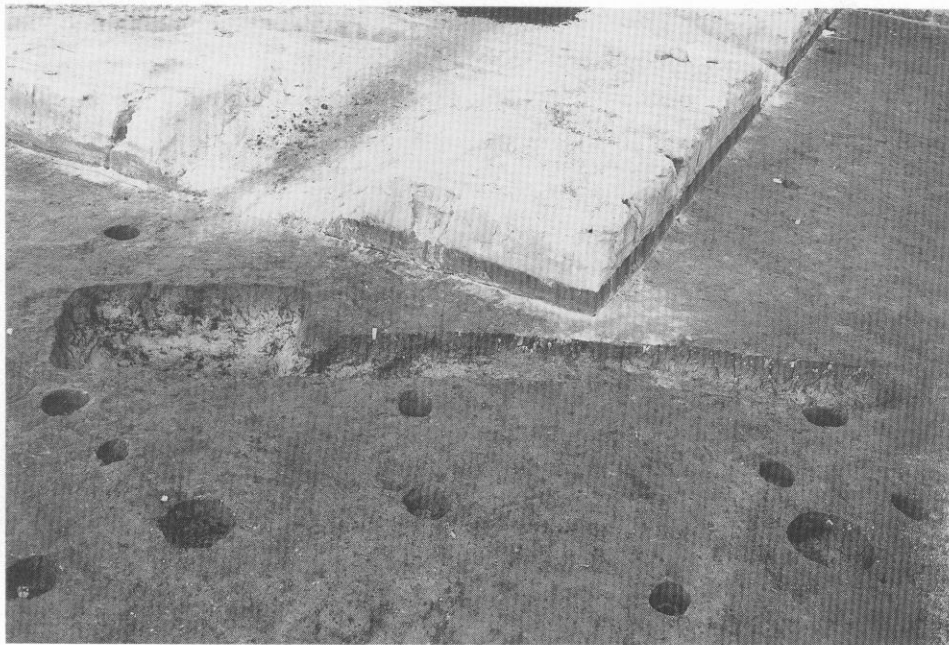
1SB018



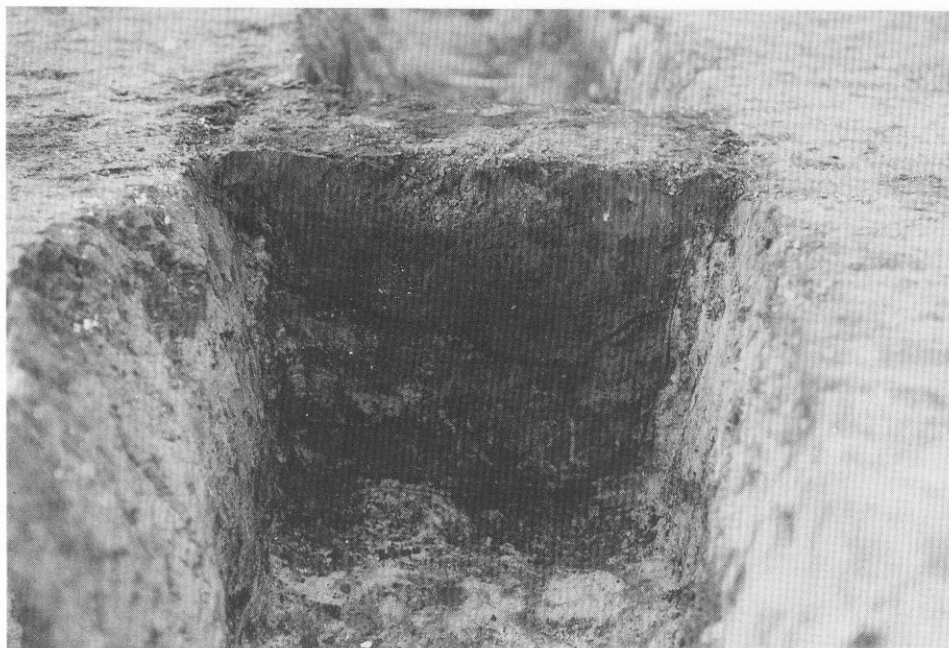
1SB019



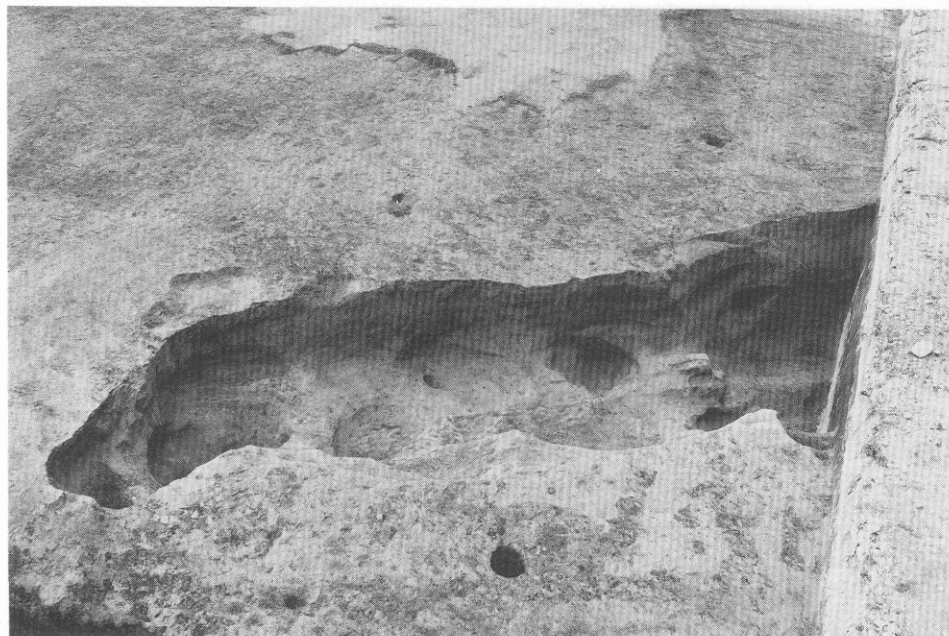
1SB024



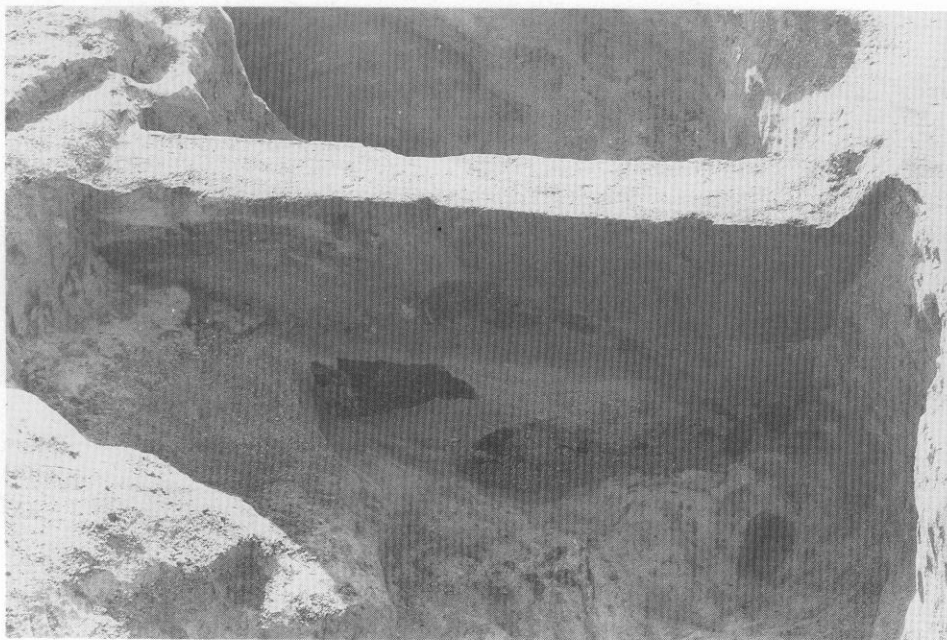
1SD002 (南東から)



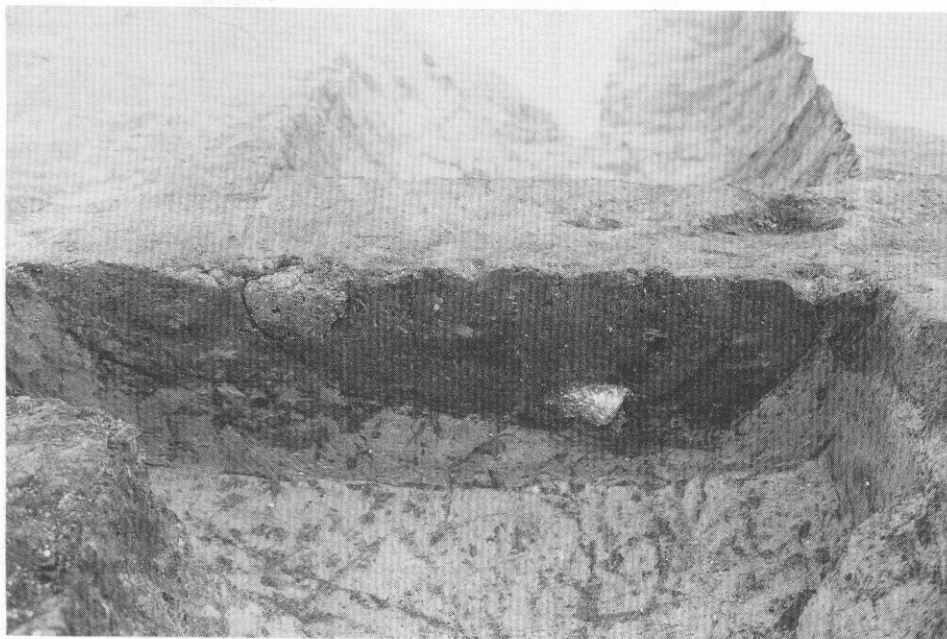
1SD002断面
(西から)



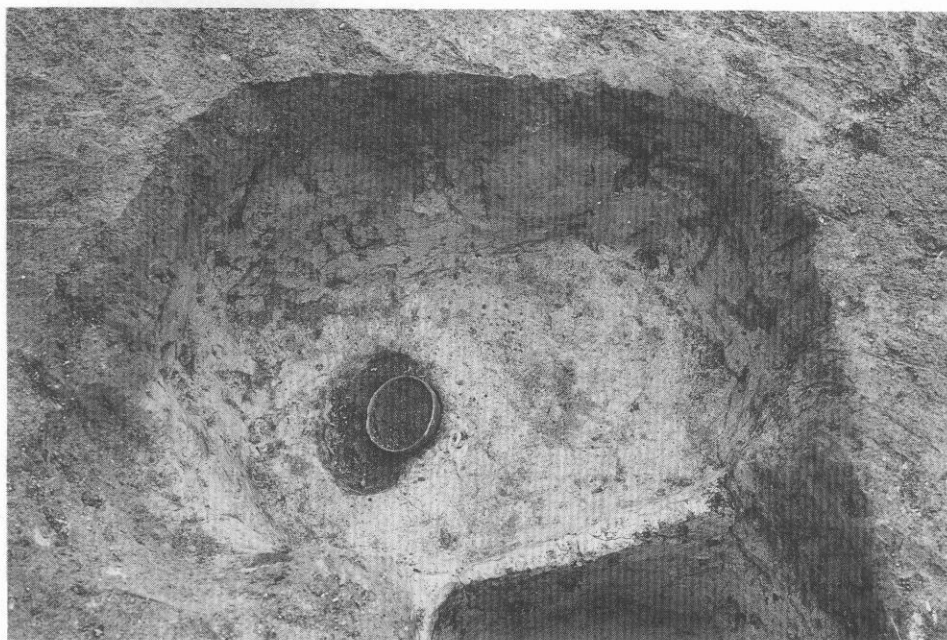
1SD011
(東から)



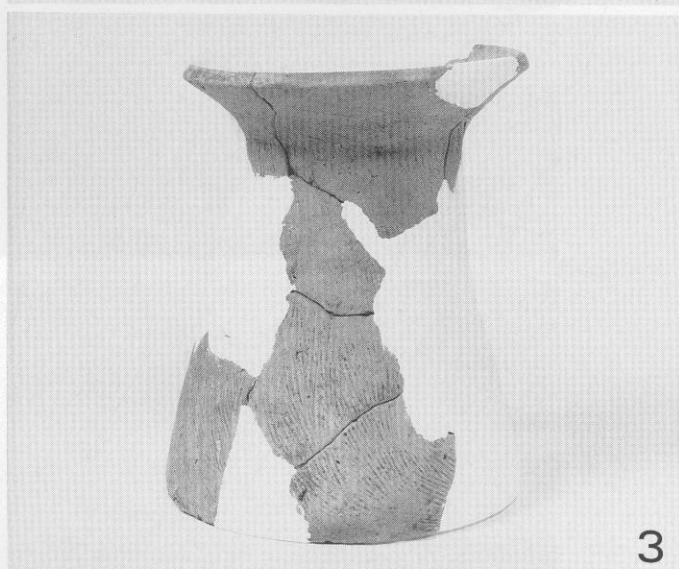
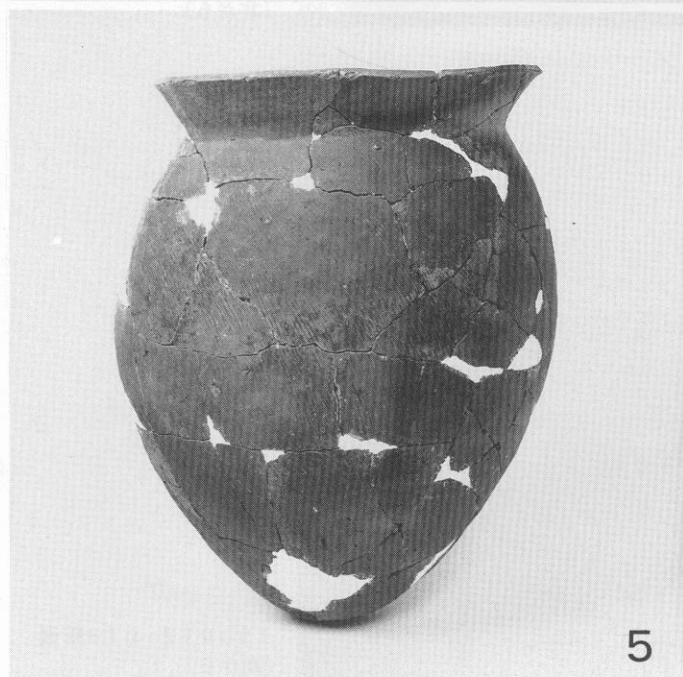
1SD011断面
(北から)



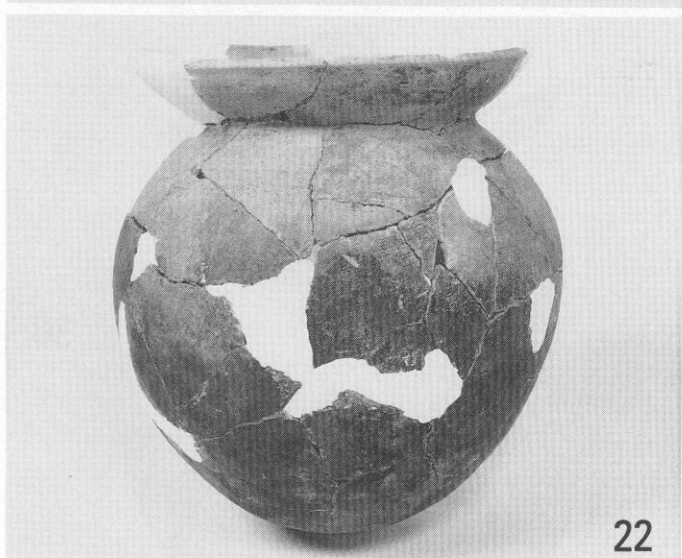
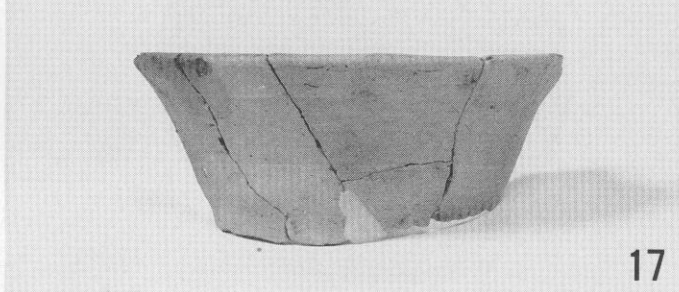
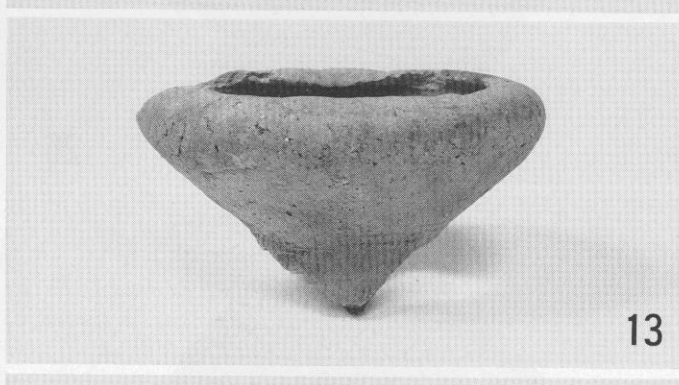
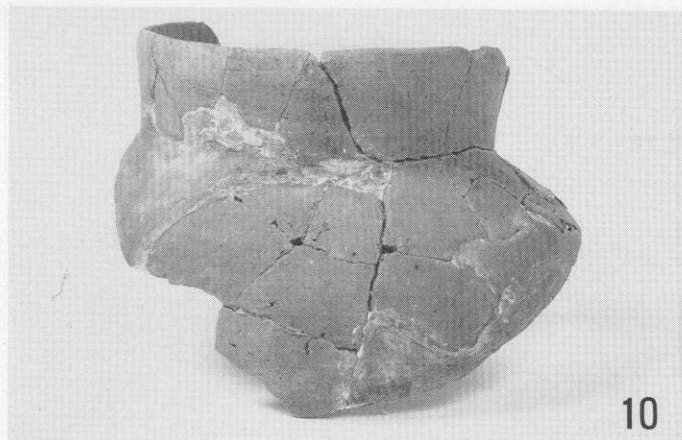
1SD012・013断面
(南から)



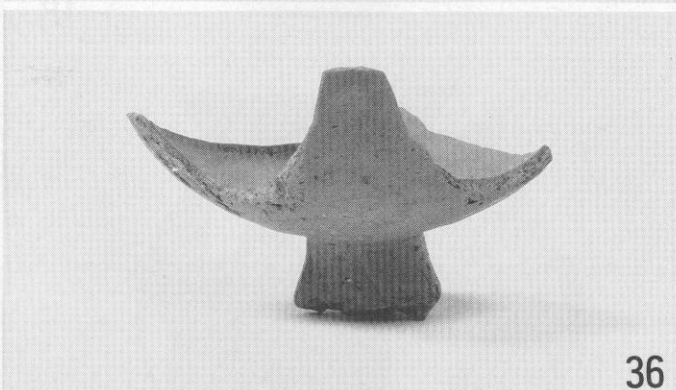
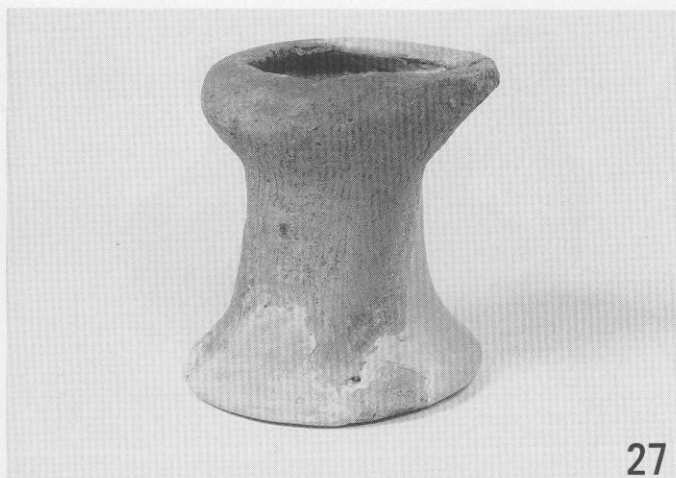
1SP249土器出土状況
(北から)



※ 写真番号は挿図番号と同じ



※ 写真番号は挿図番号と同じ



※ 写真番号は挿図番号と同じ

フリガナ	ホリイケイセキ							
書名	堀池遺跡							
副書名	福岡県筑紫野市大字二日市							
巻次								
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編集者名	奥村俊久							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092-923-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
堀池遺跡	福岡県筑紫野市大字二日市			33度 29分 28秒	130度 31分 11秒	19901016 } 19901220	1,800	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堀池遺跡	集落跡	古墳 } 時期不明	土壇 4基 掘立柱建物 3棟 溝状遺構 5条		布留形甕 小型丸底壺 沓形器台			

堀池遺跡

福岡県筑紫野市大字二日市所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書
第47集

平成9年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 秀英社印刷株式会社
福岡県筑紫野市武蔵313-13

